

平成30年度

日野市の普通会計決算概要

令和2年2月

日野市 企画部 財政課

(目次)

1	人口（住民基本台帳人口）	4
2	決算規模・決算収支	6
3	歳入	
	（1） 総括	1 0
	（2） 市税	1 3
4	歳出	
	（1） 総括	1 5
	（2） 性質別の推移	1 7
	（3） 目的別の推移	1 9
5	基金と市債	2 1
6	財政指標	
	（1） 財政力指数	2 4
	（2） 経常収支比率	2 5
	（3） 公債費負担比率	2 7
7	多摩地域26市との比較	2 8
	※ 用語解説*	3 2

○ 本資料の数値は一部を除いて「普通会計」によるものです。

普通会計は地方財政の統計上で統一的に用いる会計区分です。一般会計・特別会計の会計区分は地方公共団体によって異なるため、経年・団体間の比較が可能になるよう統計概念上の会計を作成しています。日野市の場合は、一般会計・土地区画整理事業特別会計の全部と下水道事業特別会計・後期高齢者医療特別会計の一部を算入しています。

○ 本資料の数値は表示未満を四捨五入しているため合計等が一致しない場合があります。

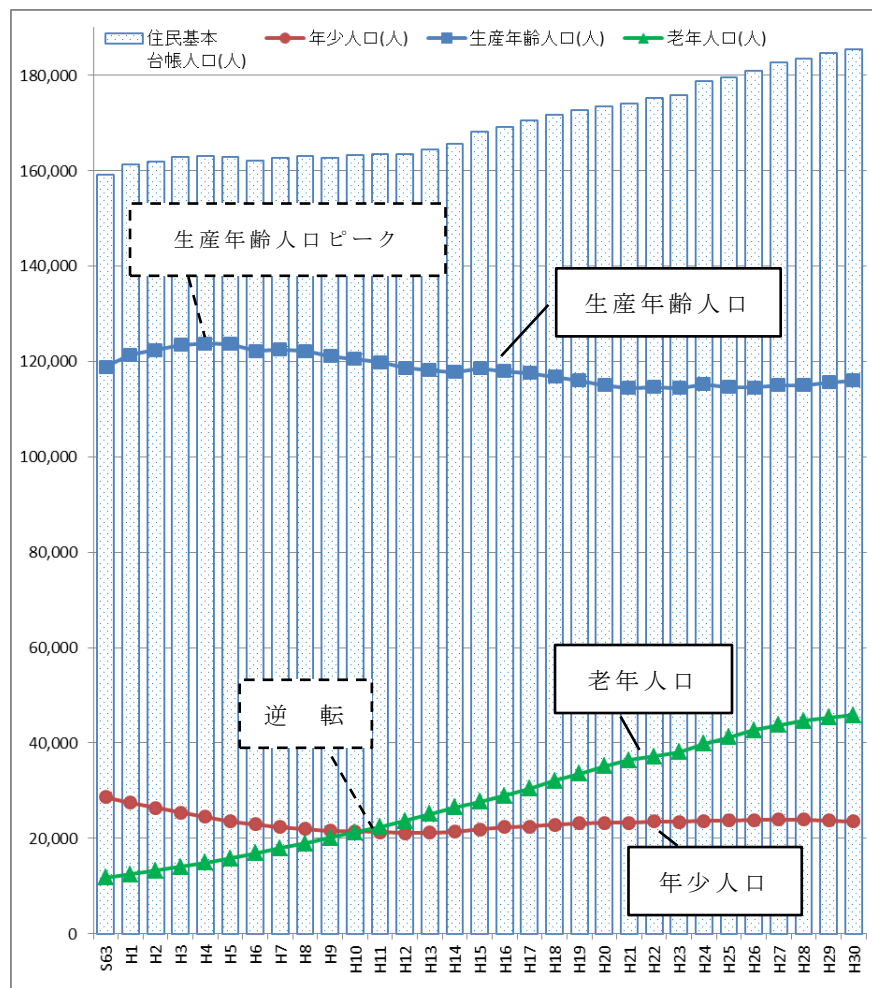
1 人口（住民基本台帳人口）

項目	H30 (決算年度)	H29 (1年前)	前年度比 (増減数)	前年度比 (増減率)	H20 (10年前)	H10 (20年前)	S63 (30年前)
人口(1月1日現在)	185,393人	184,667人	+726人	+0.4%	173,442人	163,227人	159,265人
0~14歳 〔構成比率〕	23,585人 〔12.7%〕	23,754人 〔12.9%〕	▲169人 ▲0.1ポイント	▲0.7% -	23,270人 〔13.4%〕	21,484人 〔13.2%〕	28,645人 〔18.0%〕
15~64歳 〔構成比率〕	116,013人 〔62.6%〕	115,598人 〔62.6%〕	+415人 ▲0.0ポイント	+0.4% -	115,012人 〔66.3%〕	120,467人 〔73.8%〕	118,848人 〔74.6%〕
65歳~ 〔構成比率〕	45,795人 〔24.7%〕	45,315人 〔24.5%〕	+480人 +0.2ポイント	+1.1% -	35,160人 〔20.3%〕	21,276人 〔13.0%〕	11,772人 〔7.4%〕

(概況)

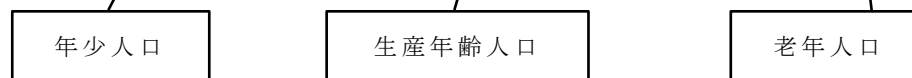
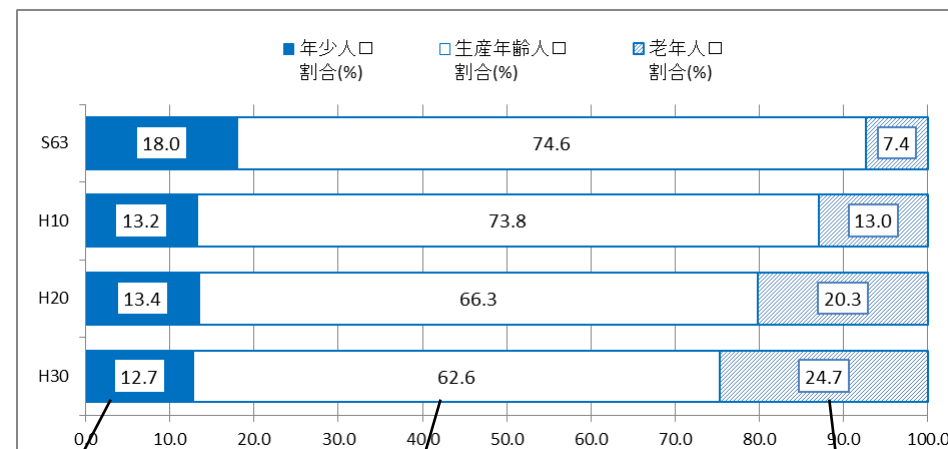
- 平成30年度（平成31年1月1日）の住民基本台帳人口は、約18万5,000人で、前年度と比べて約700人、0.4%増加して過去最多となりました。
- 年齢区分別では、年少人口が減少して、老年人口が増加しています。
 - ① 年少人口（0～14歳）は、約2万4,000人
(▲約200人、▲0.7%)
 - ② 生産年齢人口（15～64歳）は、約11万6,000人
(+約400人、+0.4%)
 - ③ 老年人口（65歳以上）は、約4万6,000人
(+約500人、+1.1%)
- 30年前の昭和63年度（昭和64年1月1日）との比較では、人口は約2万6,000人（+16.4%）増加しています。
- 年齢区分別では、
 - ① 年少人口
約2万9,000人 → 約2万4,000人
(約1/6（18%）減少)
 - ② 生産年齢人口
約11万9,000人 → 約11万6,000人（微減）
 - ③ 老年人口
約1万2,000人 → 約4万6,000人（約4倍に増加）
となって、少子高齢化が進展しています。

【グラフ】住民基本台帳人口の推移 (単位：人)

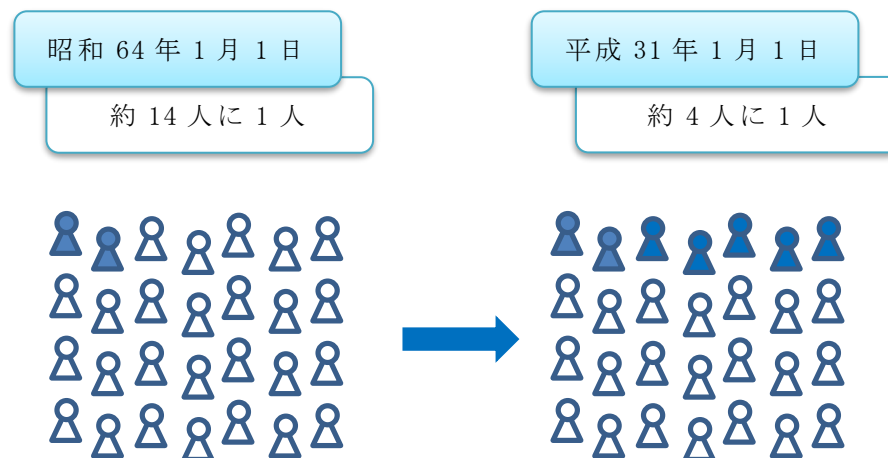


- 年少人口と老年人口は、平成11年度（平成12年1月1日）に逆転して老年人口の方が多くなりました。
- 生産年齢人口は、平成4年度（平成5年1月1日）の約12万4,000人をピークに減少傾向です。

【グラフ】住民基本台帳人口構成比率の推移 (単位：%)



■ 高齢の方（65歳以上）の割合（全人口に占める割合）



2 決算規模・決算収支

項目	H30 (決算年度)	H29 (1年前)	前年度比 (増減数)	前年度比 (増減率)	H20 (10年前)	H10 (20年前)	S63 (30年前)
歳入総額	705.6億円	687.9億円	+17.7億円	+2.6%	573.5億円	492.8億円	398.0億円
歳出総額	687.7億円	655.8億円	+31.9億円	+4.9%	554.7億円	470.0億円	382.2億円
歳入(市民一人当たり)	380,609円	372,525円	+8,085円	+2.2%	330,669円	301,911円	249,902円
歳出(市民一人当たり)	370,957円	355,151円	+15,806円	+4.5%	319,813円	287,966円	239,992円
収支							
歳入歳出差引額*	17.9億円	32.1億円	▲14.2億円	▲44.2%	18.8億円	22.8億円	15.8億円
実質収支*	16.1億円	29.2億円	▲13.1億円	▲44.7%	18.6億円	17.4億円	7.4億円
単年度収支*	▲13.1億円	6.1億円	▲19.2億円	▲312.7%	5.2億円	1.2億円	▲1.9億円
実質単年度収支*	▲13.0億円	6.3億円	▲19.3億円	▲307.1%	12.7億円	▲4.0億円	3.0億円
実質収支比率*	4.7%	8.5%	▲3.8ポイント	—	5.8%	5.5%	3.4%

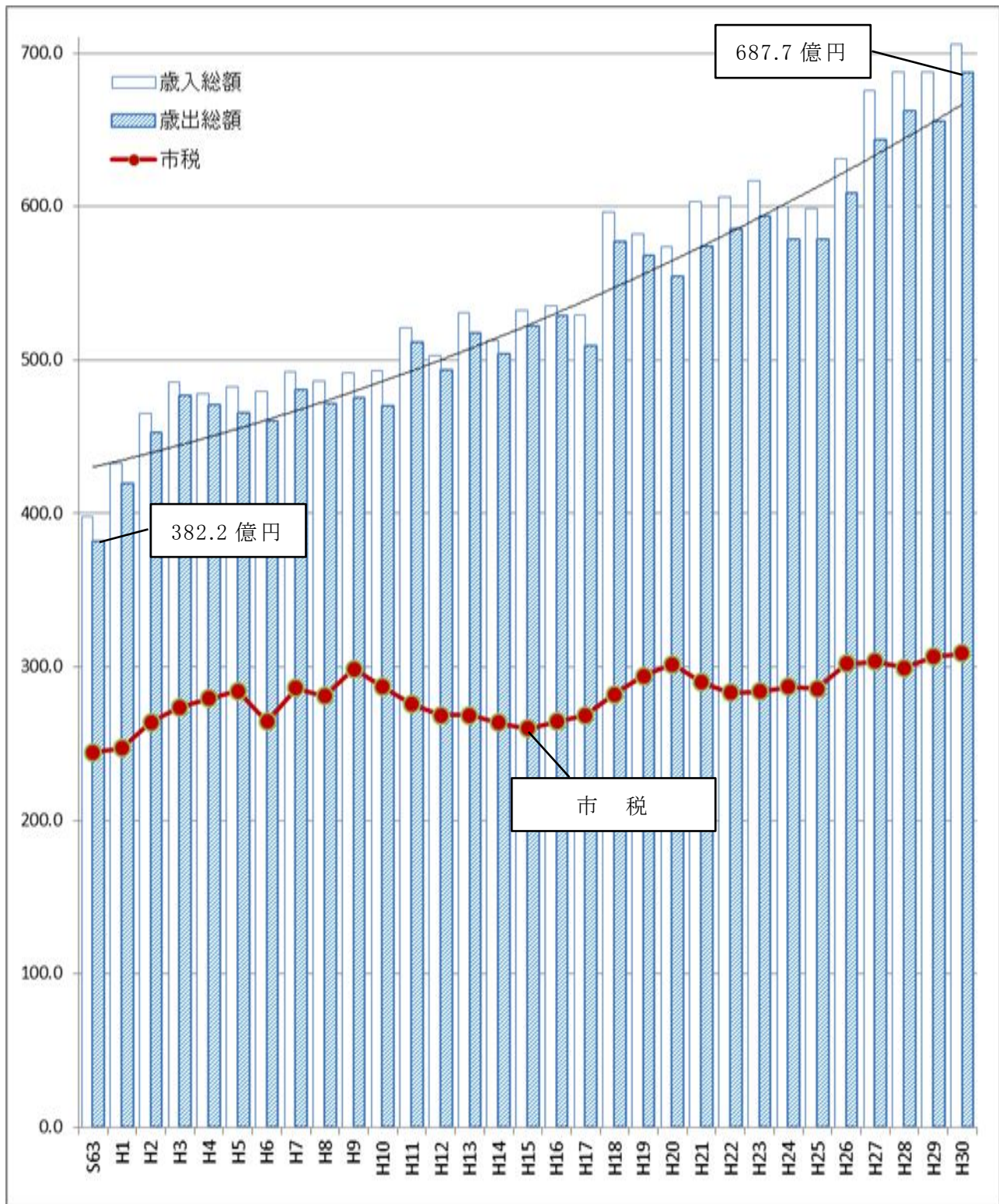
(概況)

- 平成30年度の普通会計決算は、
 - ①歳入決算額 約705.6億円(+約17.7億円、+2.6%)
 - ②歳出決算額 約687.7億円(+約31.9億円、+4.9%)
 となり、歳入歳出決算ともに過去最大となりました。
- 歳入歳出の差引額*は約17.9億円の黒字となり、このうち令和元年度に繰り越して行う事業の財源として使う約1.8億円を引いた実質収支*は、約16.1億円の黒字となりました。
 実質収支*は、前年度以前からの収支の累積で、この中には前年度の実質収支*が含まれています。
- 平成30年度の歳入歳出決算には、前年度(平成29年度)の収支剰余金、財政調整基金*(市の貯金)の取崩しや積立てによる財政調整の結果も含まれています。
 これらの影響を除いた平成30年度1年間だけの実質的な収支状況(実質単年度収支*)は、主に地方消費税交付金ほか各種交付金等の減少から約13億円の赤字となりました。
- 実質収支*の黒字・赤字の程度を表す実質収支比率*は4.7%となり、近年の平均的な水準(過去5年平均7.0%)よりも低くなりました。
 (実質収支比率=実質収支/標準財政規模*)

(「*」の記号がついている用語は、P33～P35に用語解説があります。)

【グラフ】決算規模の推移

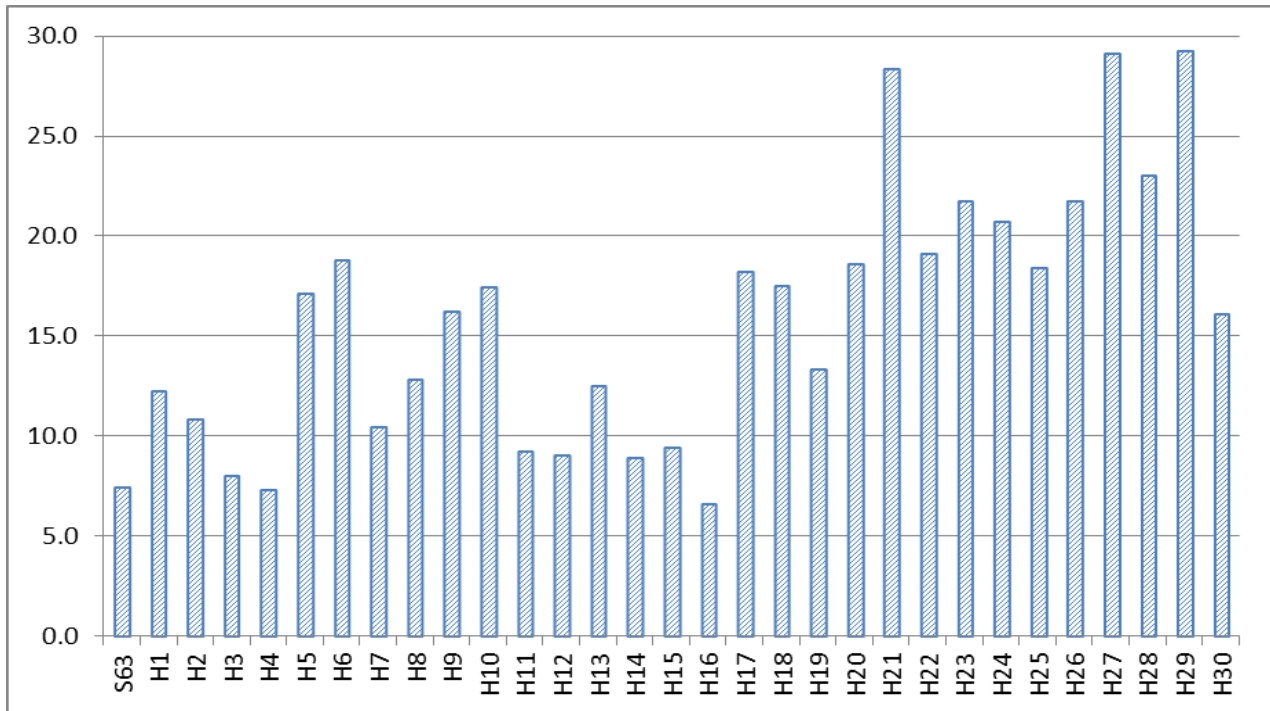
(単位：億円)



- 歳入歳出決算額は、継続的な増加傾向にあります。
昭和63年度の歳出決算額は約382.2億円でした。
平成30年度は約687.7億円なので、この30年間で歳出は約1.8倍に増加しています。
- 歳出の増加に対して、市税収入は横ばいで大きく増加していません。

【グラフ】実質収支（累積）の推移

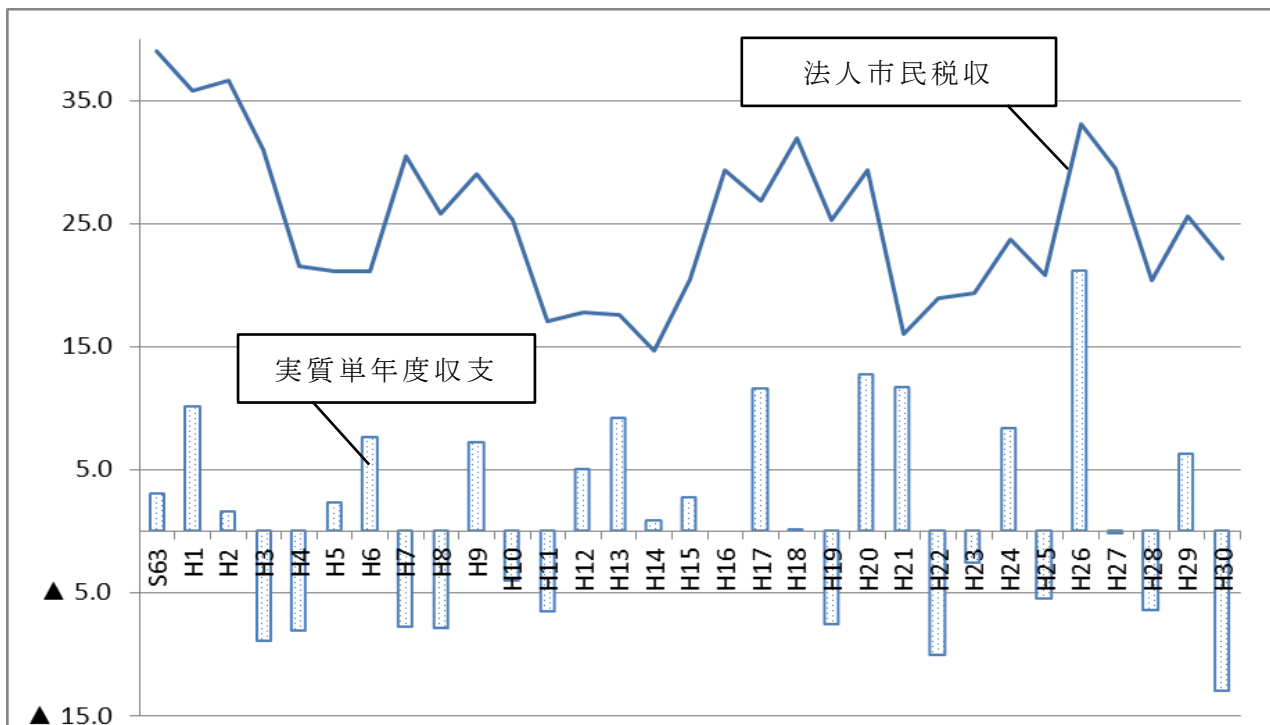
（単位：億円）



○ 実質収支*（累積の黒字・赤字）は概ね10億円から30億円の間に推移していますが、財政規模の増加などに伴いやや増加傾向にあります。

【グラフ】実質単年度収支（1年間）の推移

（単位：億円）



○ 実質単年度収支*（決算年度1年間の実施的な黒字・赤字）は、この30年間で黒字17回・赤字13回です。法人市民税の例のように、市の収入は安定的とは限らず変動があるため、黒字・赤字の波が生じる一因と考えられます。

R1年度に繰り越す財源1.8億円

①H29年度実質収支 (繰越金)29.2億円	H30年度実質収支 (繰越金)16.1億円
②基金30.6億円	
③地方債32.2億円	

○実質収支とは

- ・H30年度の歳入には①前年度の実質収支 29.2億円が含まれており、実質収支は日野市のこれまでの累積の黒字・赤字を表します。
- ・H30年度の1年間だけで、新たに16.1億円の黒字が生じたわけではありません。
- ・また、H30年度の歳入には②基金(貯金)の取崩し30.6億円、③地方債(借金)の借入れ32.2億円が含まれており、貯金の取崩しや借金のやり繰りがないと赤字になってしまいます。
- ・市の予算は社会保障費などの義務的な支出が多く、確実に支出できるようや安全側の予算を組みます。これによる予算残なども実質収支の要因です。

○貯金と借金も考えると

- ・家計に例えると
- ④「実質収支」はお財布や家にある現金
- ⑤「基金」は銀行に預けている貯金(預金)
- ⑥「地方債」は銀行から借りている借金(ローン)
- ・日野市の実情は右図のとおり、地方債の方が大分多くなっています。
- ・「実質収支」だけを見て財政状況を判断することはできません。

		④お財布や家にある現金	
		H30年度実質収支 (繰越金)16.1億円	
		⑤銀行預金	⑥銀行ローン
		基金残高 142.8億円	地方債残高 344.5億円
歳入決算 705.6億円	歳出決算 687.7億円		

3 歳入 (1) 総括

項目	H30 (決算年度)	H29 (1年前)	前年度比 (増減数)	前年度比 (増減率)	H20 (10年前)	H10 (20年前)	S63 (30年前)
歳入総額	705.6億円	687.9億円	+17.7億円	+2.6%	573.5億円	492.8億円	398.0億円
市税 〔構成比率〕	308.8億円 〔43.8%〕	306.5億円 〔44.6%〕	+2.3億円 ▲ 0.8ポイント	+0.8% —	301.9億円 〔52.6%〕	287.2億円 〔58.3%〕	244.6億円 〔61.5%〕
各種交付金等※1 〔構成比率〕	49.7億円 〔7.0%〕	58.4億円 〔8.5%〕	▲ 8.7億円 ▲ 1.4ポイント	▲ 14.9% —	33.0億円 〔5.8%〕	29.4億円 〔6.0%〕	16.5億円 〔4.2%〕
国都支出金 〔構成比率〕	210.7億円 〔29.9%〕	212.3億円 〔30.9%〕	▲ 1.6億円 ▲ 1.0ポイント	▲ 0.7% —	132.1億円 〔23.0%〕	85.2億円 〔17.3%〕	67.4億円 〔16.9%〕
使用料・財産収入等※2 〔構成比率〕	25.1億円 〔3.6%〕	29.3億円 〔4.3%〕	▲ 4.2億円 ▲ 0.7ポイント	▲ 14.2% —	26.0億円 〔4.5%〕	18.4億円 〔3.7%〕	26.5億円 〔6.7%〕
基金繰入金 〔構成比率〕	30.6億円 〔4.3%〕	14.7億円 〔2.1%〕	+15.9億円 +2.2ポイント	+107.7% —	25.3億円 〔4.4%〕	19.4億円 〔3.9%〕	7.6億円 〔1.9%〕
市債 〔構成比率〕	32.2億円 〔4.6%〕	25.8億円 〔3.7%〕	+6.5億円 +0.8ポイント	+25.2% —	33.2億円 〔5.8%〕	24.3億円 〔4.9%〕	12.3億円 〔3.1%〕
その他 ※3 〔構成比率〕	48.4億円 〔6.9%〕	41.0億円 〔6.0%〕	+7.4億円 +0.9ポイント	+18.0% —	22.0億円 〔3.8%〕	28.9億円 〔5.9%〕	22.9億円 〔5.8%〕

※1 各種交付金等 地方譲与税、都税交付金、地方交付税、地方特例交付金、交通安全対策特別交付金

※2 使用料・財産収入等 分担金及び負担金、使用料及び手数料、財産収入、寄附金

※3 その他 繰越金、諸収入、特別会計繰入金

(概況)

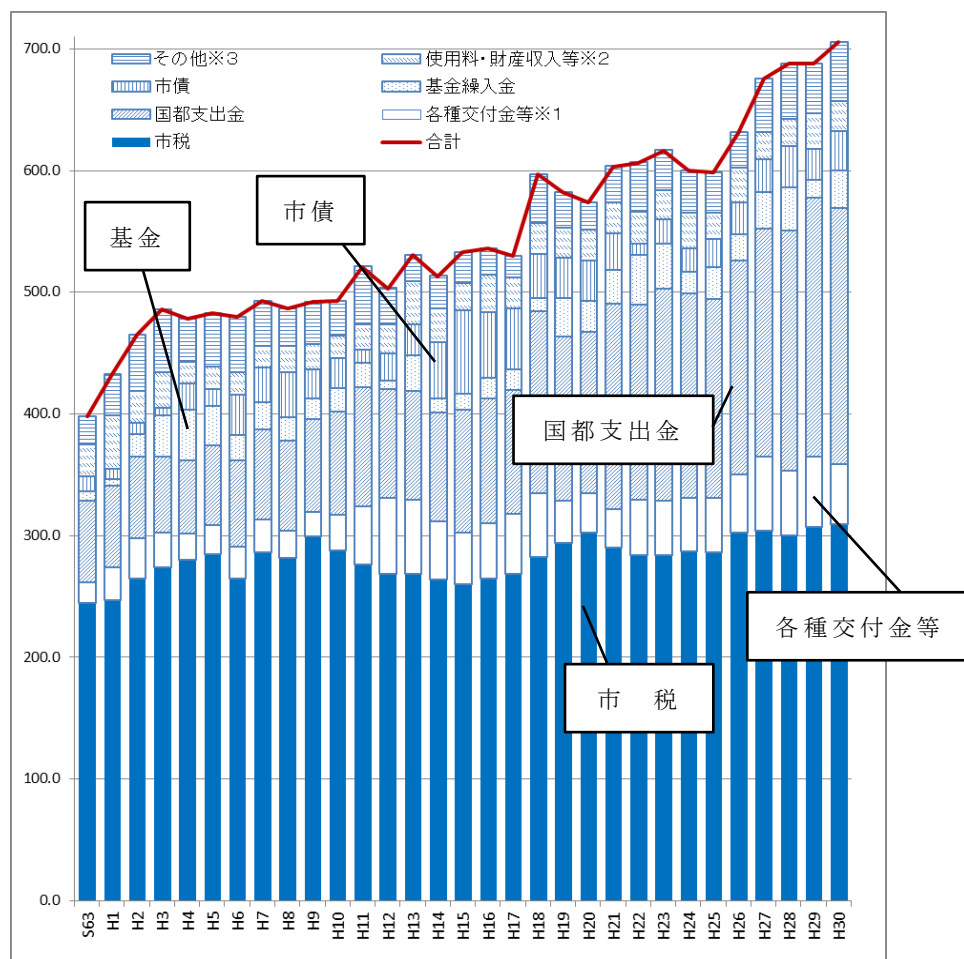
- 平成30年度の普通会計歳入決算額は約705.6億円で、前年度と比べて約17.7億円、2.6%増加しました。
- 市財政の根幹である市税が約2.3億円・0.8%の増となり、歳入決算額全体は増加したものの、地方消費税交付金などの各種交付金等が約8.7億円・14.9%の減、使用料・財産収入等が約4.2億円・14.2%の減と大きく減少しました。
- 国都支出金は、歳出の扶助費（生活保護費など社会保障のための給付費）と連動した国都負担分の増があったものの、国による経済対策としての臨時給付金事業の終了や区画整理事業の進捗などから、約1.6億円減少しました。
- このため、市の貯金である基金の取崩し（基金繰入金）を約15.9億円・107.7%の増、市の借金である地方債の借入れ（市債）を6.5億円・25.2%の増とし、各種事業の財源をまかないました。
（基金については積立額も約11億円増加しています。）

(主な項目の前年度からの増減要因)

項 目	増 減 理 由
市税	<p>○市税は約2.3億円・0.8%増の約308.8億円。</p> <p>○内訳では法人市民税は一部企業の収益減少などから約3.4億円の減となりましたが、個人市民税は納税義務者の増加などから約1.9億円の増、固定資産税は土地評価額の増加などから約1.5億円の増、都市計画税では税率改定などから約2.1億円の増となりました。</p>
各種交付金等	<p>○各種交付金等は約8.7億円・14.9%減の約49.7億円。</p> <p>○内訳では地方消費税交付金が平成30年度税制改正による都道府県間の清算基準の抜本的な見直しの影響から約5.5億円の減、地方交付税が普通交付税における過年度分の精算などから約2.5億円の減となりました。</p>
国都支出金	<p>○国都支出金は約1.6億円・0.7%減の約210.7億円。</p> <p>○内訳では国庫支出金が約3.6億円・3.1%減の約114.4億円、都支出金が約2.1億円・2.2%増の約96.3億円。</p> <p>○国庫支出金では、民間保育園の建設補助やプラスチック類資源化施設の建設にかかる補助金、生活保護費・保育園給付費など社会保障関連経費の国庫負担分が増加していますが、経済対策としての臨時給付補助金や区画整理事業における道路等の国庫負担金が減少しています。</p> <p>○都支出金では、子育て支援の充実にかかる補助金などが増加しています。</p>
使用料・財産収入等	<p>○分担金及び負担金、使用料及び手数料、財産収入、寄附金の合計は約4.2億円・14.2%減の約25.1億円。</p> <p>○内訳では、分担金及び負担金は民間保育施設利用者の増加（施設数の増加・定員拡大）、財産収入は市有地の有効活用による売却が増加しましたが、開発に伴う寄附金が大きく減少しています。</p>
基金繰入金	<p>○市の貯金の取崩しである基金繰入金は約15.9億円・107.7%増の約30.6億円。</p> <p>○地方消費税交付金の減少等による財源不足に対応するため財政調整基金を約9.5億円取り崩したほか、プラスチック類資源化施設の建設など各種事業の財源とするためにその他の基金を約21.1億円取り崩しました。</p>
市債	<p>○市の借金である市債は約6.5億円・25.2%増の約32.2億円。</p> <p>○臨時財政対策債の借入れは抑制しましたが、市役所本庁舎の整備やプラスチック類資源化施設の建設などから、借入れが増加しました。</p>

【グラフ】歳入金額の推移

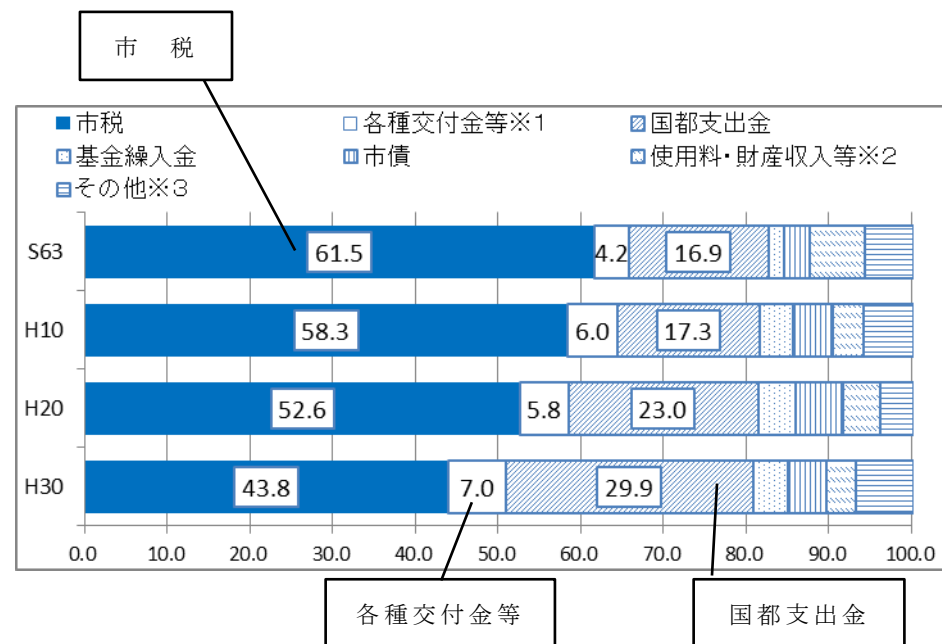
(単位：億円)



- 市税は近年横ばいで、大きく増加していません。
- 社会保障関連経費の増加等に伴い国都支出金も増加していますが、増加が続く歳出に対応するため、基金と市債の活用、様々な財源の確保に努めています。

【グラフ】歳入構成比率の推移

(単位：%)



- 歳入構成比率の推移では、この30年間で市税の比率が大きく減少して（61.5%→43.8%）、社会保障関連経費の増加などから国都支出金の比率が増えて（16.9%→29.9%）います。
- また、各種交付金等は普通交付税の交付団体となったこと、地方消費税交付金が税率の引き上げによって増加したことなどから比率が増えて（4.2%→7.0%）います。

3 歳入 (2) 市税

項目	H30 (決算年度)	H29 (1年前)	前年度比 (増減数)	前年度比 (増減率)	H20 (10年前)	H10 (20年前)	S63 (30年前)
個人市民税	132.8億円	130.9億円	+1.9億円	+1.5%	132.1億円	126.2億円	117.5億円
法人市民税	22.2億円	25.6億円	▲3.4億円	▲13.3%	29.3億円	25.3億円	39.0億円
固定資産税	118.8億円	117.3億円	+1.5億円	+1.3%	110.5億円	105.1億円	62.8億円
軽自動車税	1.6億円	1.5億円	+0.1億円	+4.0%	1.0億円	0.7億円	0.6億円
市たばこ税 ※1	8.4億円	8.3億円	+0.0億円	+0.4%	7.7億円	8.2億円	6.3億円
都市計画税	25.1億円	23.0億円	+2.1億円	+9.3%	21.3億円	21.4億円	13.4億円
その他	0.0億円	0.0億円	+0.0億円	+0.0%	0.0億円	0.3億円	5.0億円
合計	308.8億円	306.5億円	+2.3億円	+0.8%	301.9億円	287.2億円	244.6億円

※1 市たばこ税の昭和63年度の決算額は、市たばこ消費税の金額です。

(概況)

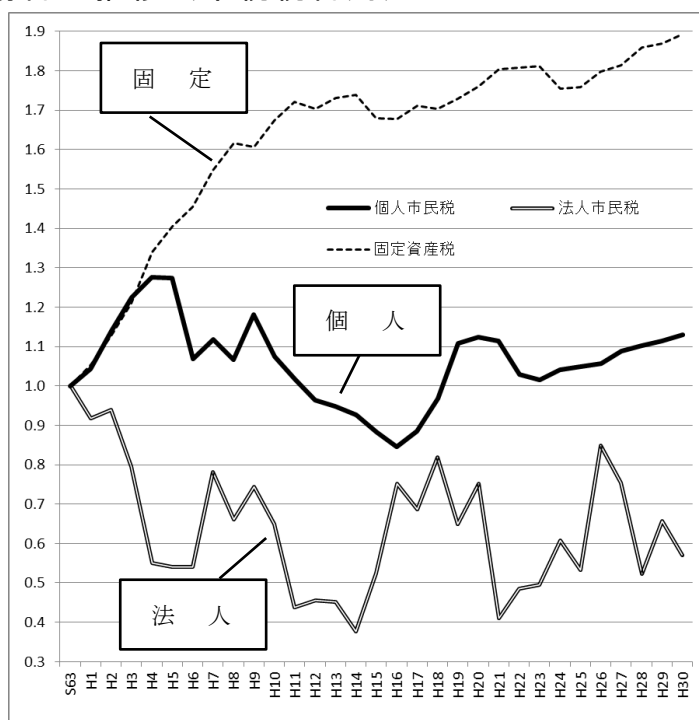
- 市財政の根幹である市税は、景気変動や税制改正などの影響を受けて増減していますが、この10年間では概ね300億円前後で推移しています。
- 個人市民税は納税義務者数の増などから増加し、法人市民税は一部企業の収益減（平成29年度の一時的な増の反動）などから減少しています。
- 固定資産税は土地評価額の増など、軽自動車税は四輪自動車登録台数の増などから増加しています。
- 市たばこ税は、喫煙者の減少などから長期的には減少傾向にありますが、税制改正の影響から増加しています。

【グラフ】市税の推移

～昭和63年度を1とした場合の推移（市税税目別）～

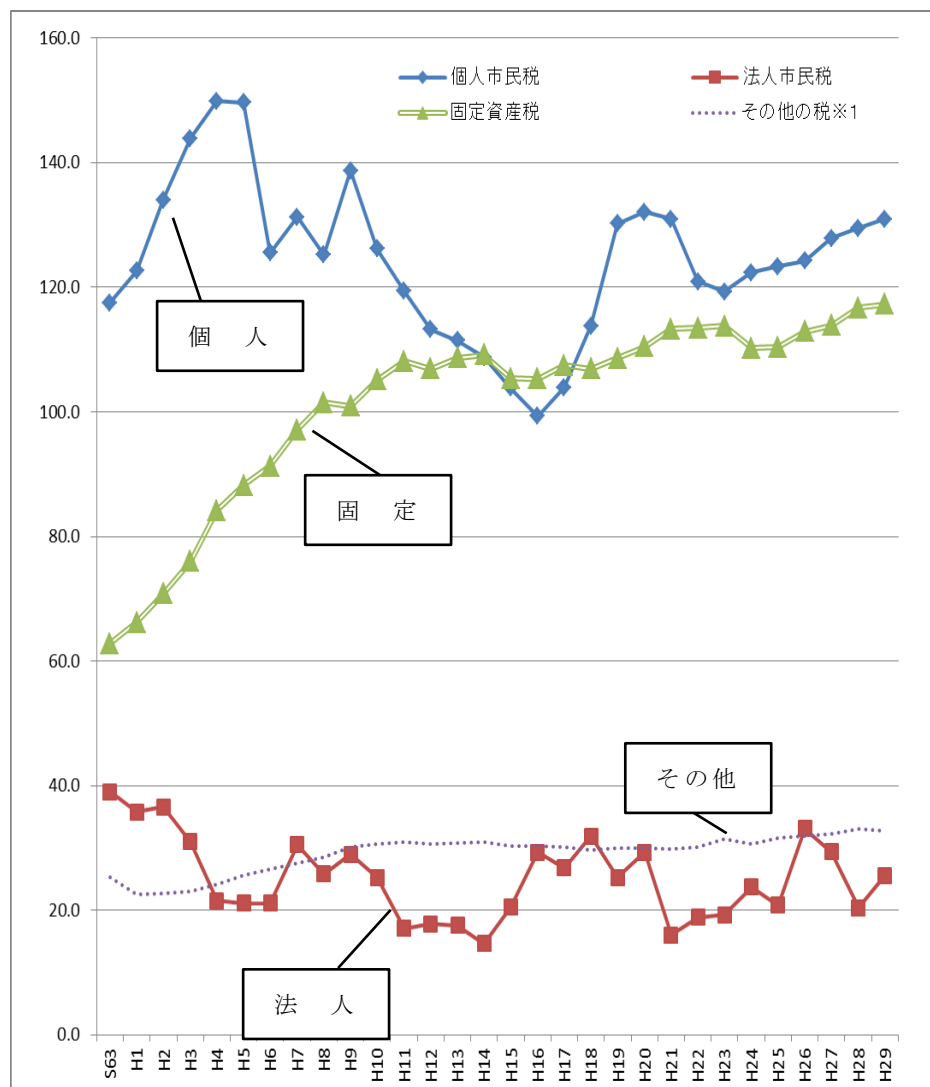
○昭和63年度を1とした場合の推移をみると、固定資産税が比較的安定して推移しているのに対して、個人市民税と法人市民税は変動が大きいことが分かります。

○特に法人市民税は0.4～1.0と変動の幅が大きく、増減を繰り返しているため、税収の変動に対する備えが重要です。



【グラフ】市税（金額）の推移

（単位：億円）



※1 その他の税 軽自動車税、市たばこ税、都市計画税

○ 個人市民税

バブル景気崩壊後の景気後退や減税政策の影響などから平成5年度以降は減少傾向が続き、平成16年度には100億円を下回りました。

その後、平成17年度から景気の回復などを受けて増収に転じ、さらに税制改正（所得税から住民税への税源移譲）などもあり平成20年度まで増加が続きました。リーマンショックによる景気後退などを受けて、平成21年度から再び減少傾向になりましたが、その後の景気の緩やかな回復や税制改正（年少扶養控除の廃止等）の影響、納税義務者数の増などから緩やかな増加傾向となっています。

○ 法人市民税

企業業績の影響などを顕著に受けるため、変動が最も大きく表れる税目です。この30年間では、昭和63年度の約39.0億円から平成14年度の約14.7億円まで、約24億円もの変動が生じています。税制改正（法人住民税率を引き下げて地方交付税の原資とするために国税化するなど）、海外経済や為替変動の影響なども大きく受けるため、今後の見通しは不透明です。

○ 固定資産税

内訳にある償却資産を除けば、個人市民税や法人市民税よりは景気の影響を受けにくい税目です。3年に1度の評価替え（元号で言えば3の倍数の年度）では、家屋の減価などから減少する傾向がありますが、この10年間では概ね110億円台で推移しています。

4 歳出 (1) 総括

項目	H30 (決算年度)	H29 (1年前)	前年度比 (増減数)	前年度比 (増減率)	H20 (10年前)	H10 (20年前)	S63 (30年前)
歳出総額	687.7億円	655.8億円	+31.9億円	+4.9%	554.7億円	470.0億円	382.2億円
人件費 〔構成比率〕	99.9億円 〔14.5%〕	96.7億円 〔14.7%〕	+3.2億円 ▲ 0.2ポイント	+3.3% -	105.6億円 〔19.0%〕	124.2億円 〔26.4%〕	78.9億円 〔20.6%〕
うち職員給※1 〔構成比率〕	66.3億円 〔9.6%〕	66.4億円 〔10.1%〕	▲ 0.0億円 ▲ 0.5ポイント	▲ 0.0% -	73.8億円 〔13.3%〕	94.4億円 〔20.1%〕	61.9億円 〔16.2%〕
扶助費 〔構成比率〕	187.7億円 〔27.3%〕	180.1億円 〔27.5%〕	+7.6億円 ▲ 0.2ポイント	+4.2% -	96.3億円 〔17.4%〕	68.1億円 〔14.5%〕	32.0億円 〔8.4%〕
公債費 〔構成比率〕	31.8億円 〔4.6%〕	31.3億円 〔4.8%〕	+0.5億円 ▲ 0.2ポイント	+1.6% -	33.8億円 〔6.1%〕	38.2億円 〔8.1%〕	28.8億円 〔7.5%〕
繰出金 〔構成比率〕	77.3億円 〔11.2%〕	75.5億円 〔11.5%〕	+1.8億円 ▲ 0.3ポイント	+2.3% -	62.0億円 〔11.2%〕	41.5億円 〔8.8%〕	16.0億円 〔4.2%〕
物件費 〔構成比率〕	97.0億円 〔14.1%〕	98.1億円 〔15.0%〕	▲ 1.1億円 ▲ 0.9ポイント	▲ 1.1% -	88.9億円 〔16.0%〕	79.7億円 〔17.0%〕	50.7億円 〔13.3%〕
補助費等 〔構成比率〕	70.9億円 〔10.3%〕	69.4億円 〔10.6%〕	+1.5億円 ▲ 0.3ポイント	+2.2% -	61.3億円 〔11.1%〕	52.6億円 〔11.2%〕	31.1億円 〔8.1%〕
投資的経費 〔構成比率〕	93.0億円 〔13.5%〕	83.7億円 〔12.8%〕	+9.3億円 +0.8ポイント	+11.1% -	69.3億円 〔12.5%〕	51.4億円 〔10.9%〕	89.9億円 〔23.5%〕
その他の経費※2 〔構成比率〕	30.2億円 〔4.4%〕	21.1億円 〔3.2%〕	+9.1億円 +1.2ポイント	+43.0% -	37.6億円 〔6.8%〕	14.3億円 〔3.0%〕	54.9億円 〔14.4%〕
議会費・総務費 〔構成比率〕	77.2億円 〔11.2%〕	61.9億円 〔9.4%〕	+15.3億円 +1.8ポイント	+24.6% -	70.2億円 〔12.6%〕	58.2億円 〔12.4%〕	73.4億円 〔19.2%〕
民生費 〔構成比率〕	331.6億円 〔48.2%〕	322.3億円 〔49.1%〕	+9.3億円 ▲ 0.9ポイント	+2.9% -	209.3億円 〔37.7%〕	147.3億円 〔31.3%〕	71.3億円 〔18.7%〕
衛生費 〔構成比率〕	68.1億円 〔9.9%〕	55.8億円 〔8.5%〕	+12.3億円 +1.4ポイント	+22.0% -	51.2億円 〔9.2%〕	47.5億円 〔10.1%〕	27.7億円 〔7.3%〕
労働・農業・商工費 〔構成比率〕	10.3億円 〔1.5%〕	10.4億円 〔1.6%〕	▲ 0.1億円 ▲ 0.1ポイント	▲ 1.1% -	8.6億円 〔1.5%〕	7.3億円 〔1.5%〕	4.3億円 〔1.1%〕
土木費 〔構成比率〕	79.1億円 〔11.5%〕	80.7億円 〔12.3%〕	▲ 1.5億円 ▲ 0.8ポイント	▲ 1.9% -	84.7億円 〔15.3%〕	84.6億円 〔18.0%〕	109.6億円 〔28.7%〕
消防費 〔構成比率〕	22.6億円 〔3.3%〕	24.4億円 〔3.7%〕	▲ 1.8億円 ▲ 0.4ポイント	▲ 7.4% -	20.7億円 〔3.7%〕	20.5億円 〔4.4%〕	12.6億円 〔3.3%〕
教育費 〔構成比率〕	66.3億円 〔9.6%〕	68.5億円 〔10.5%〕	▲ 2.2億円 ▲ 0.8ポイント	▲ 3.3% -	76.3億円 〔13.8%〕	66.4億円 〔14.1%〕	54.4億円 〔14.2%〕
公債費 〔構成比率〕	31.8億円 〔4.6%〕	31.3億円 〔4.8%〕	+0.5億円 ▲ 0.2ポイント	+1.6% -	33.8億円 〔6.1%〕	38.2億円 〔8.1%〕	28.8億円 〔7.5%〕
その他の経費※3 〔構成比率〕	0.7億円 〔0.1%〕	0.5億円 〔0.1%〕	+0.2億円 +0.0ポイント	+51.2% -	0.1億円 〔0.0%〕	0.0億円 〔0.0%〕	0.0億円 〔0.0%〕

※ 1 職員給 一般職の給料と手当で、退職金と共済組合負担金は含まない

※ 2 (性質別) その他の経費 維持補修費、投資・出資・貸付金、積立金

※ 3 (目的別) その他の経費 災害復旧費、諸支出金

(概況)

- 平成30年度の普通会計歳出決算額は約687.7億円で、前年度と比べて約31.9億円、4.9%の増となりました。主な要因は、市役所本庁舎整備やプラスチック類資源化施設建設などの普通建設事業費が約9.1億円、基金への積立金が約1.1億円増加したことです。(基金については取崩額も約15.9億円増加しています。)
- 性質別にみると義務的経費では人件費が約3.2億円・3.3%増の約99.9億円、扶助費は約7.6億円・4.2%増の約187.7億円、公債費は約0.5億円・1.6%増の約31.8億円となりました。
- 人件費は、選挙執行の減などから時間外勤務手当は減少しましたが、一般職の定年退職者数の増から退職金が増加しました。
- 扶助費は、民間保育園の定員拡大などから増加し、公債費は、平成26年度に借り入れた臨時財政対策債や土地区画整理事業のための借入金の元金償還が始まったことなどから増加しました。
- その他の経費では、繰出金は介護保険や後期高齢者医療において高齢化の進展などから増加し、補助費等は障害者自立支援に係る給付や浅川清流環境組合に対する新可燃ごみ処理施設建設への負担などから増加しました。

(性質別・投資的経費のうち普通建設事業費の内訳)

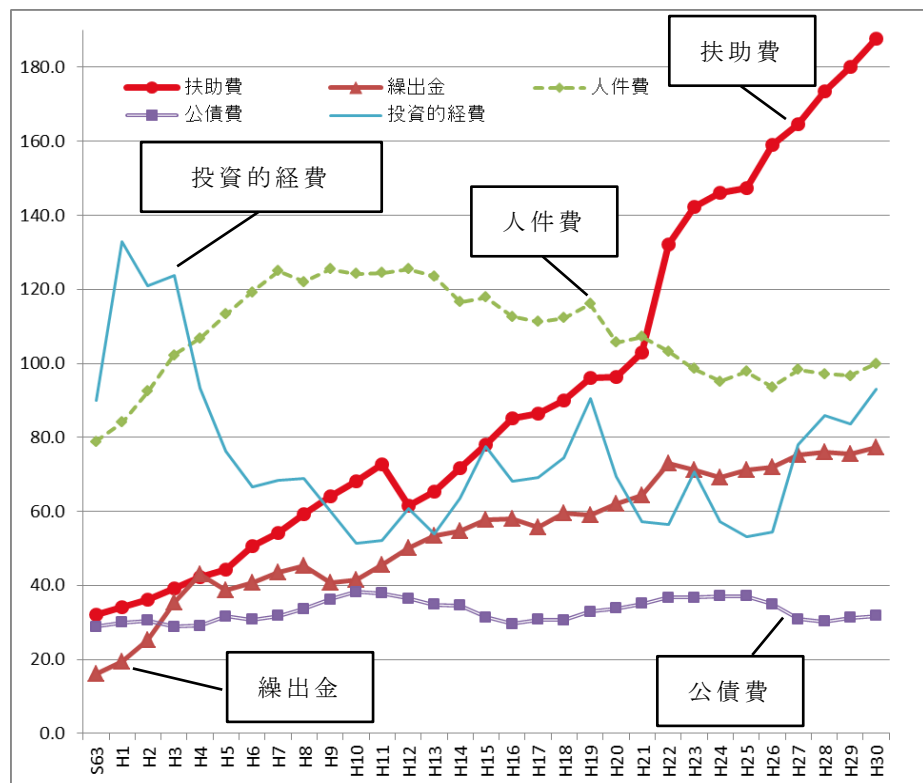
- 投資的経費という言葉から大規模な新規整備をイメージしますが、内訳は下記のとおりで新規整備の割合は高くありません。
- 土地区画整理事業が約33%で最も多く、次に既存施設の更新が約29%、新規整備は約20%、民間保育園等の民間施設の整備補助が約15%を占めます。

内訳	決算額	構成比	主な事業
公共施設(更新整備)	27.0億円	29.2%	市役所本庁舎免震改修 7.3億円
公共施設(新規整備)	18.3億円	19.8%	プラスチック類資源化施設建設工事 12億円
公共施設(用地取得)	2.6億円	2.8%	新葉山緑地用地購入 1.5億円
土地区画整理事業	30.3億円	32.8%	西平山区画整理事業業務委託料 15.7億円
民間施設整備補助等	14.2億円	15.3%	民間保育園(3園)建設費補助金 10.9億円
合計	92.3億円	100.0%	

4 歳出 (2) 性質別の推移

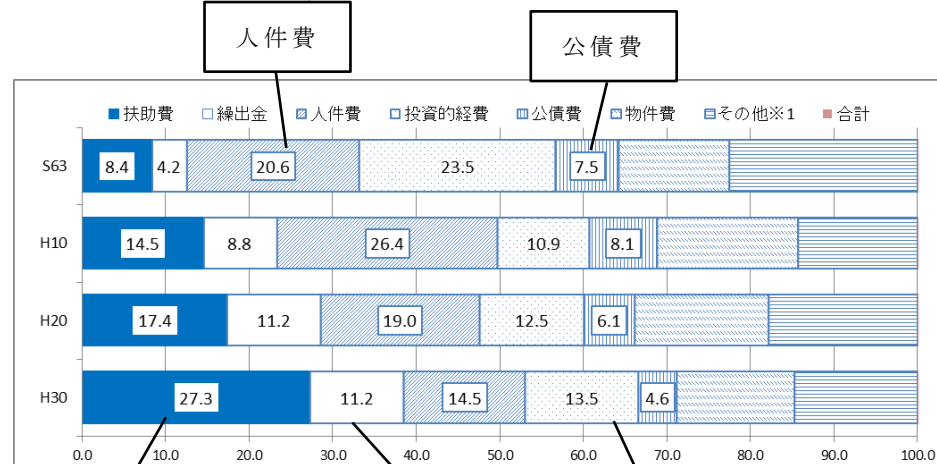
項目	増減理由
人件費	<p>○職員の給料や各種委員の報酬等となる人件費は、約3.2億円・3.3%増の約99.9億円。</p> <p>○学校における働き方改革の一環としてのスクール・サポート・スタッフ設置などから委員等報酬が増加し、一般職の給料等は定年退職者数の増から退職金が増加しました。</p>
扶助費	<p>○生活保護費など福祉の法令等に基づいて支出される扶助費は、約7.6億円・4.2%増の約187.7億円。</p> <p>○臨時福祉給付金は事業の終了から減少しましたが、生活保護費（高齢化による医療扶助費の増など）、障害者自立支援給付費、民間保育園の給付費（定員拡大）などが増加しました。</p>
公債費	<p>○借金の元利償還金となる公債費は、約0.5億円・1.6%増の約31.8億円。</p> <p>○平成26年度に借り入れた臨時財政対策債や土地区画整理事業のための借入金の元金償還が始まったことなどから増加しました。</p>
繰出金	<p>○特別会計に支出する繰出金は、約1.8億円・2.3%増の約77.3億円。</p> <p>○内訳では、介護保険と後期高齢者医療は被保険者の増加等からそれぞれ約1.1億円、約1.3億円増加しましたが、下水道事業は管渠建設費、公債費の減等から約0.8億円減少しました。</p>
物件費	<p>○事務事業の委託料や物品の購入・借上等となる物件費は、約1.1億円・1.1%減の約97億円。</p> <p>○一時保育事業の充実や学校ICT関連機器の借上料等の増加はありますが、保育園民営化に伴う仮設園舎借上や万願寺グラウンド用地借上の終了などから減少しています。</p>
補助費等	<p>○各種団体や個人への助成、一部事務組合への負担金等となる補助費等は、約1.5億円・2.2%増の約70.9億円。</p> <p>○浅川清流環境組合への負担金や市内連絡バスへの補助等が増加しています。</p>
投資的経費	<p>○社会資本の形成等となる投資的経費は、約9.3億円・11.1%増の約93億円になりました。内訳は前ページ下段のとおりです。</p> <p>○公共工事では、都市計画道路3・4・24号線や北川原公園整備工事の減はありましたが、市役所本庁舎免震改修工事及びクリーンセンタープラスチック類資源化施設建設工事の本格化などから全体では増加しました。</p> <p>民間への補助では、民間保育園建設への補助は減少しましたが、社会教育センター建設への補助等が増加しました。</p> <p>また、土地区画整理事業は、西平山地区で日3・3・2号線の用地確保を積極的に進めたことなどから増加しました。</p>

【グラフ】主な性質別経費の推移 (単位：億円)



- この 30 年間の推移では、扶助費と民生費の特別会計（国民健康保険、介護保険、後期高齢者医療）への繰出金は、高齢化の進展などから継続的な増加傾向にあります。
- 人件費や公債費、投資的経費は、増減はあるものの抑制されています。
- 市税収入は伸び悩み、「まち」の高齢化も進んでいます。この他にも複雑化・多様化する地域課題に対応するためには、歳入歳出ともに様々な見直し等を行う必要があります。

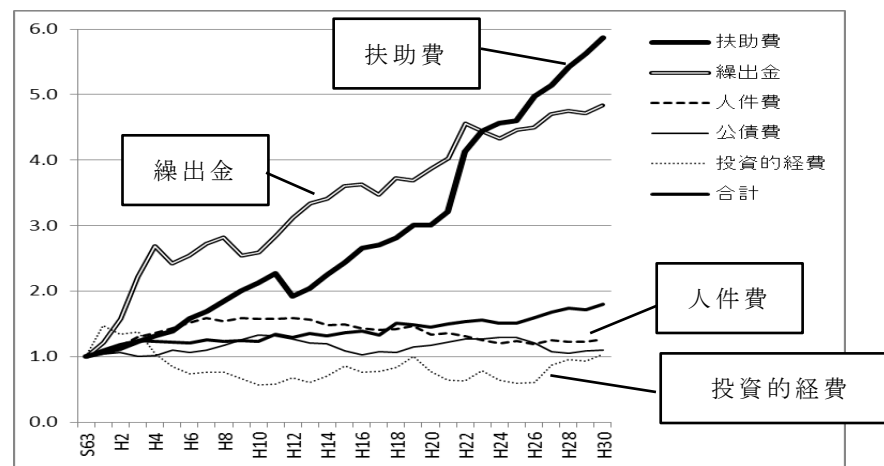
【グラフ】性質別構成比率の推移 (単位：%)



※1 その他 補助費等、維持補修費、投資・出資・貸付金、積立金

【グラフ】主な性質別経費の推移

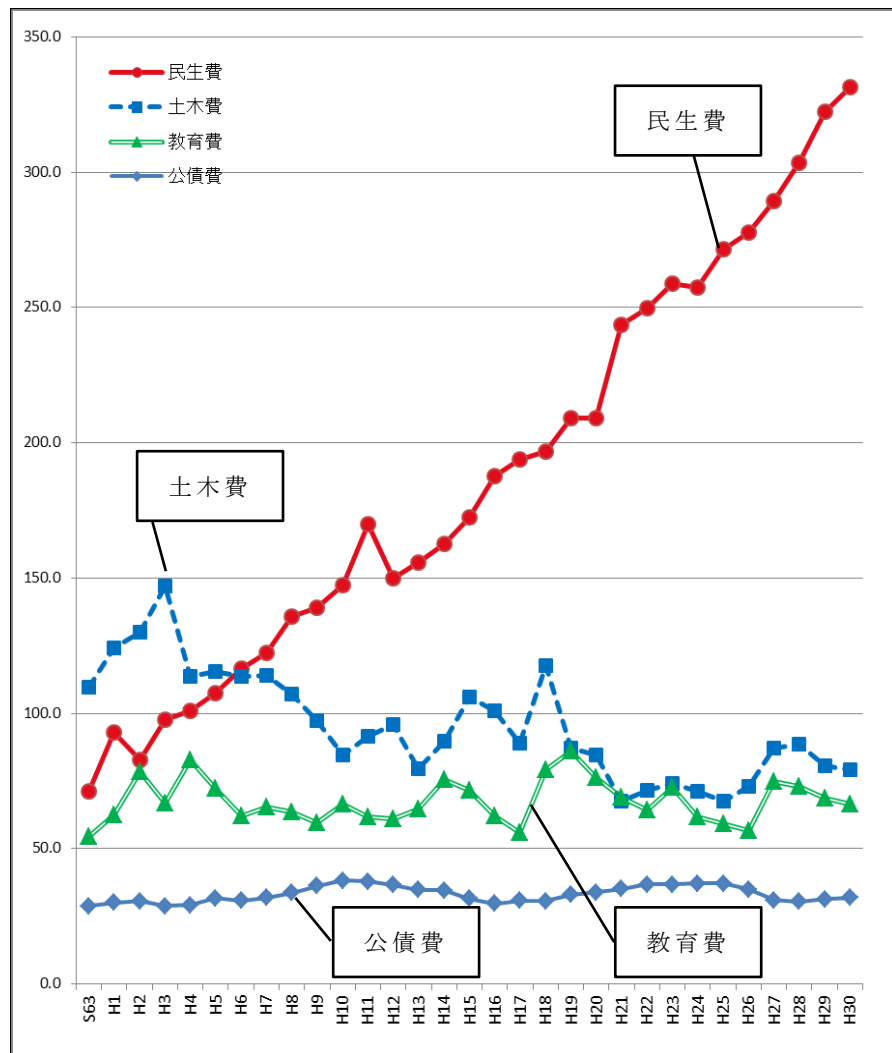
～昭和63年度を1とした場合の推移～



4 歳出 (3) 目的別の推移

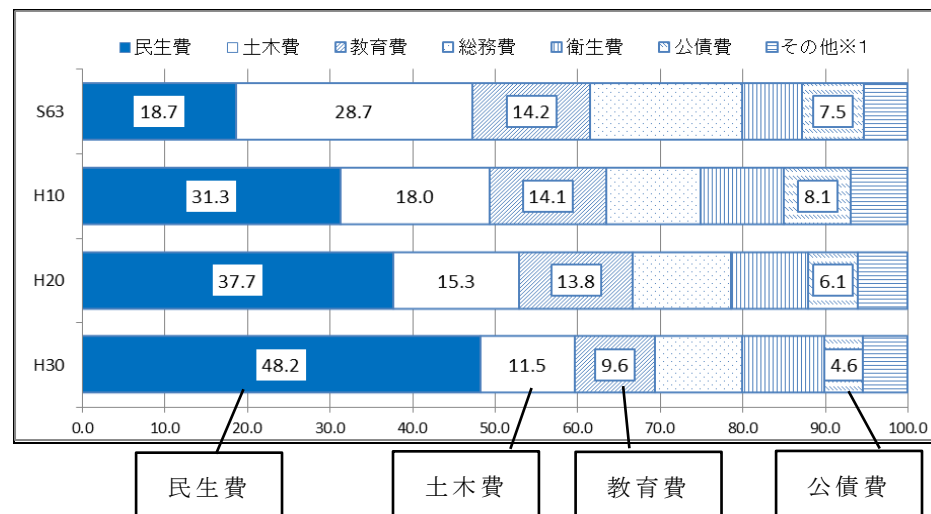
項目	増減理由
議会・総務費	<p>○議会費・総務費の合計は約15.3億円・24.6%増の約77.2億円。</p> <p>○選挙費の減少はありますが、市役所本庁舎の免震改修工事の本格化や基金への積立金、一般職の退職金の増加（定年退職者数の増）などから全体では増加しました。</p>
民生費	<p>○民生費は約9.3億円・2.9%増の約331.6億円。</p> <p>○少子高齢化の進展などを背景に、扶助費や特別会計への繰出金などが増加しました。</p>
衛生費	<p>○衛生費は約12.3億円・22.0%増の約68.1億円。</p> <p>○市立病院事業への補助の減はありますが、プラスチック類資源化施設整備工事の本格化や浅川清流環境組合への負担金等の増加（新可燃ごみ処理施設建設工事の増）などから全体では増加しました。</p>
労働・農業・商工費	<p>○労働費・農業費・商工費の合計は約0.1億円・1.1%減の約10.3億円。</p> <p>○商工・観光事業等における組織人員体制の充実や企業立地奨励金などの増加はありますが、農産物直売所の整備補助金における工事終了や防災兼用農業用井戸の補助対象案件がなかったことなどから全体では減少しました。</p>
土木費	<p>○土木費は約1.5億円・1.9%減の約79.1億円。</p> <p>○土地区画整理事業（西平山地区・豊田南地区）の増加はありますが、都市計画道路3・4・24号線や北川原公園整備工事の減などから全体では減少しました。</p>
消防費	<p>○消防費は約1.8億円・7.4%減の約22.6億円。</p> <p>○消防団装備品等の充実による増加はありますが、特殊地下壕対策事業の減や消防団詰所器具置場の建替、災害医療器具保管庫の整備が終了したことなどから全体では減少しました。</p>
教育費	<p>○教育費は約2.2億円・3.3%減の約66.3億円。</p> <p>○学校ICT環境の充実（パソコン等機器や校務支援システムの更新）、社会教育センター建設への支援などの増はありますが、市民の森ふれあいホール用地購入の減や市民グラウンド整備の完了等から全体では減少しました。</p>

【グラフ】主な目的別経費の推移 (単位：億円)



○ この30年間の推移では、性質別と同様の理由から民生費が継続的な増加傾向にあり、その他の経費は横ばい・減少傾向です。

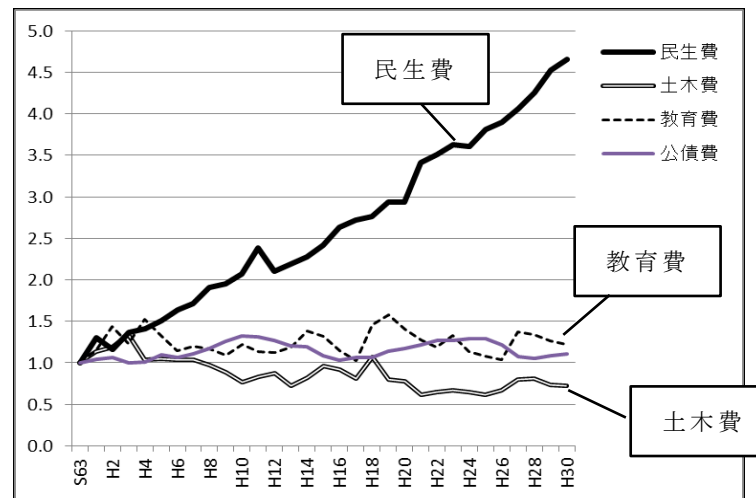
【グラフ】目的別構成比率の推移 (単位：%)



※1 その他 議会費、労働費、農林水産業費、商工費、消防費、災害復旧費、諸支出金

【グラフ】主な目的別経費の推移

～昭和63年度を1とした場合の推移～



5 基金と市債

項 目		H30 (決算年度)	H29 (1年前)	前年度比 (増減数)	前年度比 (増減率)	H20 (10年前)	H10 (20年前)	S63 (30年前)
普通 会計	基金残高	142.8億円	145.9億円	▲ 3.2億円	▲ 2.2%	136.0億円	70.7億円	119.3億円
	うち財政調整基金* 残高	42.7億円	42.7億円	+0.0億円	+0.1%	31.0億円	3.8億円	31.4億円
	市債残高	344.5億円	341.5億円	+2.9億円	+0.9%	398.6億円	280.9億円	254.5億円
	基金残高－市債残高	▲ 201.7億円	▲ 195.6億円	▲ 6.1億円	+3.1%	▲ 262.6億円	▲ 210.2億円	▲ 135.2億円
全 会計	基金残高	150.9億円	144.3億円	+6.6億円	+4.6%	118.2億円	82.4億円	－
	市債残高	671.9億円	695.6億円	▲ 23.7億円	▲ 3.4%	941.9億円	859.0億円	－
	基金残高－市債残高	▲ 521.0億円	▲ 551.3億円	+30.3億円	▲ 5.5%	▲ 823.7億円	▲ 776.6億円	－

(概 況)

< 普通会計 >

- 普通会計の基金残高（市の貯金残高）は約 142.8 億円で、前年度に比べて約 3.2 億円、2.2% の減となりました。
このうち財政調整基金* の残高は約 42.7 億円で、前年度に比べて約 400 万円、0.1% の増となりました。

※基金には出納整理期間はありませんが、普通会計の決算統計のルールに合わせて、出納整理期間中における平成 30 年度分の積立・取崩を反映しています。

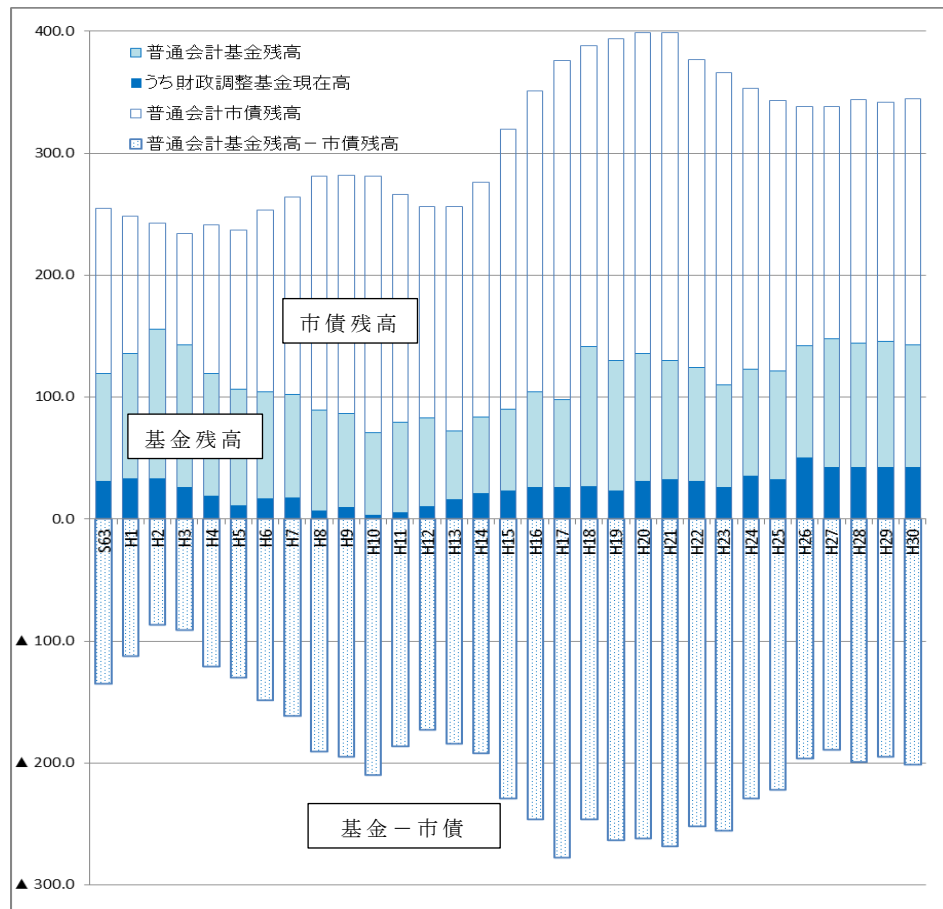
- 普通会計の市債残高（市の借金残高）は約 344.5 億円で、前年度に比べて約 2.9 億円、0.9% の増となりました。
- 平成 30 年度は、歳出では扶助費や投資的経費などが増加した一方、歳入では地方消費税交付金をはじめとした各種交付金や国都支出金などが減少したことから、基金（貯金）の取崩しと市債（借金）の借入れを増加し、各種事業の財源確保を図りました。

< 全会計 >（土地開発公社を含む市全体の場合）

- 全会計の基金残高は約 150.9 億円で前年度に比べて約 6.6 億円、4.6% の増となり、市債残高は公営企業会計（下水道事業会計、病院事業会計）で償還が進んだことなどから前年度に比べて約 23.7 億円、3.4% 減の約 671.9 億円となりました。

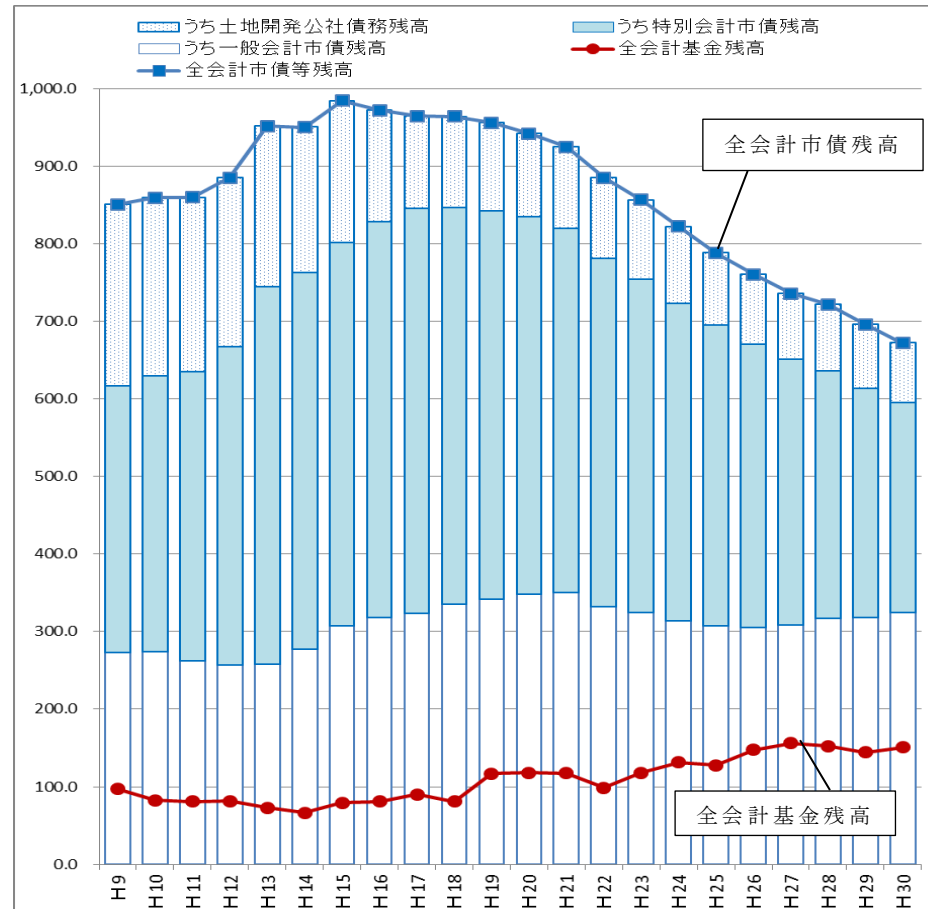
※全会計の場合については、普通会計と異なり出納整理期間中における平成 30 年度分の積立・取崩を反映せず、年度末（3/31）時点の金額を使っています。

【グラフ】（普通会計）基金と市債残高の推移（単位：億円）



- 普通会計では基金の2倍を超える市債残高があり、市全体では4.5倍近くの差になっています。
- 社会保障関連経費の増加や公共施設の更新、また、繰り返し起こる景気の変動や災害などに備えて、基金と市債のバランスを図った活用が必要です。

【グラフ】（全会計）基金と市債残高の推移（単位：億円）



- 土地開発公社の債務残高を含む市全体の市債残高は、平成15年度には1,000億円近く(984.3億円)まで増加しましたが、行財政改革の取組などにより平成30年度末で約671.9億円(▲312.4億円)まで減少しています。

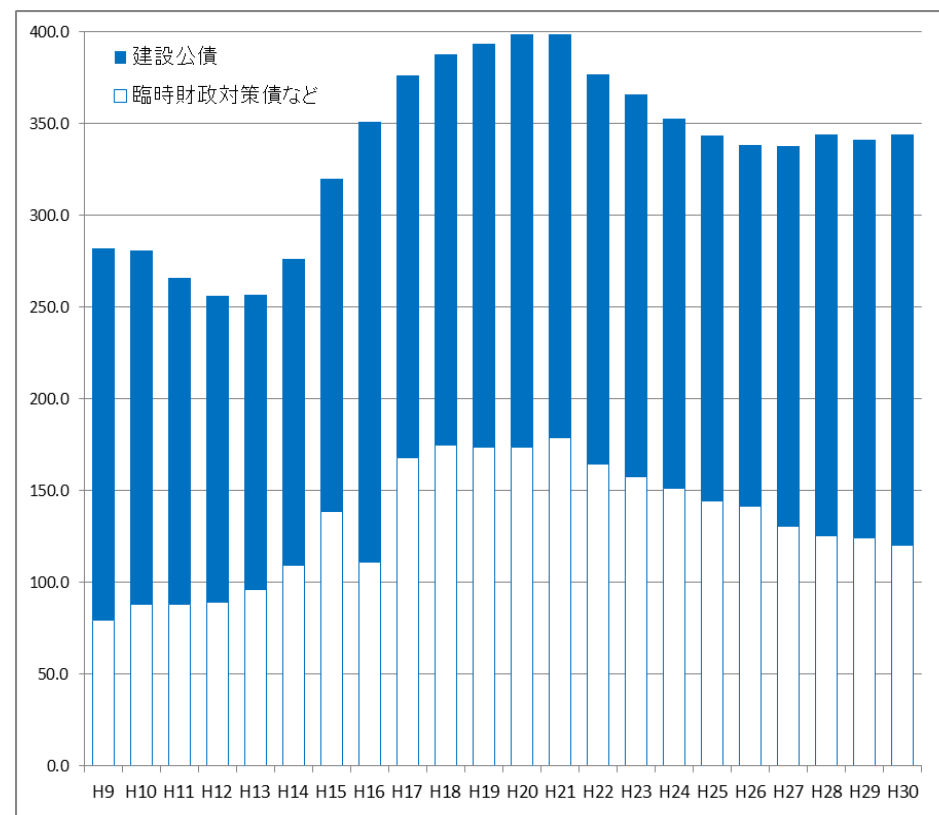
(普通会計) 基金内訳ごとの残高の推移 (単位：億円)

基金名	H26	H27	H28	H29	H30
財政調整基金	50.5	42.9	42.5	42.7	42.7
公共施設建設基金	16.7	16.7	15.7	17.2	18.5
環境緑化基金	6.8	6.2	5.1	5.8	6.6
職員退職手当基金	12.6	12.6	12.6	14.3	13.3
平和事業基金	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0
バリアフリー事業推進基金	0.9	0.9	1.1	1.0	0.9
市民体育施設整備基金	4.9	6.0	6.6	6.7	8.1
学校施設整備基金	5.5	6.9	6.3	7.2	8.0
減債基金	2.7	3.1	3.3	3.3	3.3
新選組関連資料集	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2
ごみ処理関連施設及び周辺環境整備基金	16.2	22.1	26.5	26.8	27.9
福祉あんしん基金	0.5	0.6	0.7	1.3	1.1
土地区画整理事業基金	23.6	29.0	22.8	18.4	11.1
合計	142.0	148.2	144.3	145.9	142.8

- 基金は景気の動向による税収の変動、公共施設の老朽化対策等の推進、災害への対応、社会保障関係経費の増大など、将来の歳入減少や歳出増加などに備えた積立金です。
- 地方自治体の財政運営は、単年度の収支均衡だけを保てばよいものではなく、長期間を通じて起こる財政変動に耐えられる弾力性が必要です。基金の積立と活用を行うことで、将来にわたる安定的な行政サービスの提供に努めています。

- 地方自治体の借金は、原則、建設事業（建設公債）や災害復旧の財源などに限定されており、臨時財政対策債のように様々な用途に使える借金は例外的な措置です。
- 近年では、臨時財政対策債などの残高は減少しており、公共施設整備のための借金の残高はやや増加しています。

(普通会計) 地方債残高の内訳 (単位：億円)



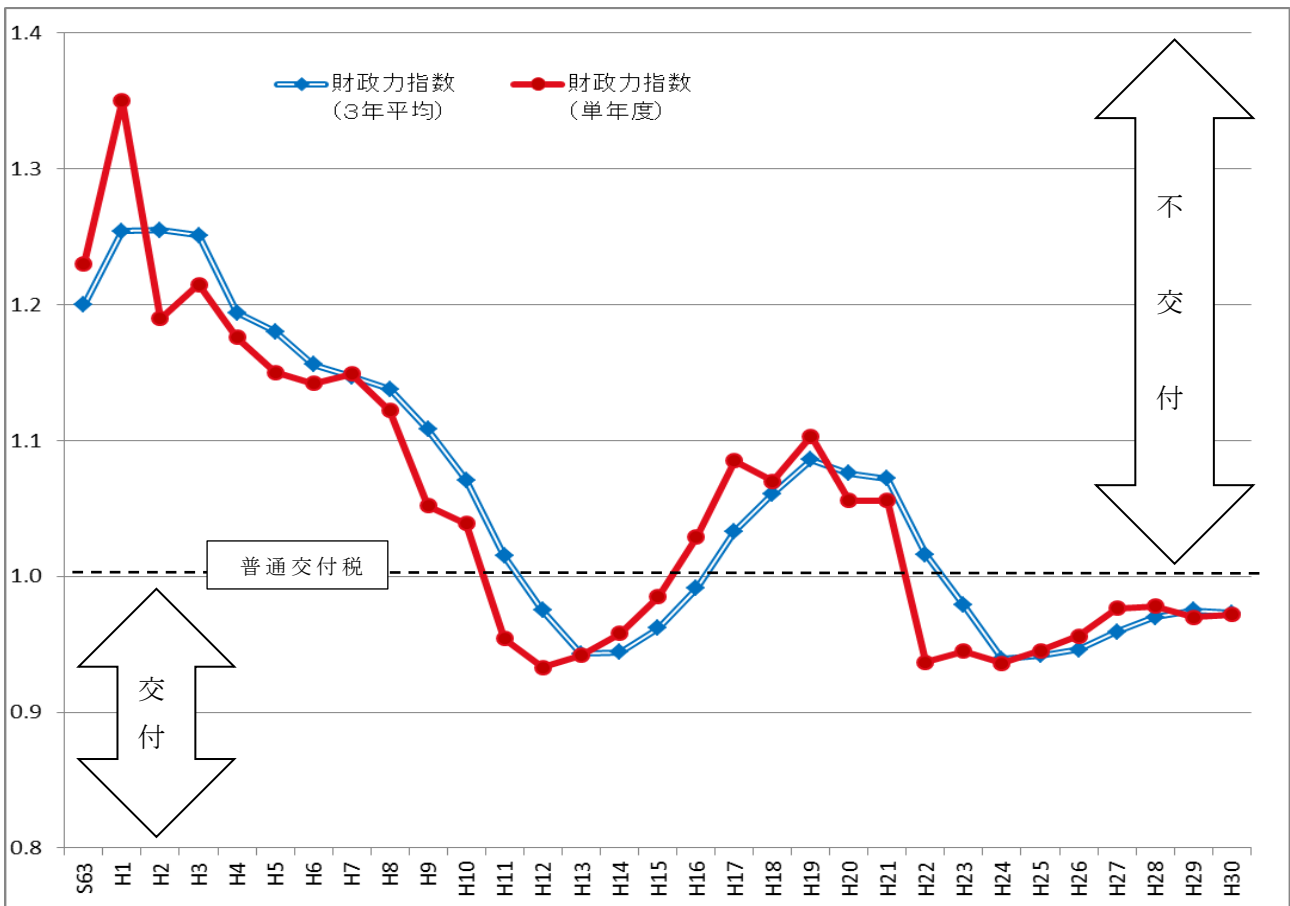
6 財政指標 (1) 財政力指数

項目	H30 (決算年度)	H29 (1年前)	前年度比 (増減数)	前年度比 (増減率)	H20 (10年前)	H10 (20年前)	S63 (30年前)
財政力指数*							
3年平均	0.973	0.975	▲ 0.002	－	1.076	1.071	1.200
単年度	0.972	0.970	+0.002	－	1.056	1.039	1.230

(概況)

- 財政力の強さ、財源の豊かさを表す財政力指数*は、単年度は0.972ですが、3年平均が0.973で前年度と比べて悪化しています。
- 財政力指数*は、普通交付税の算定における基準財政収入額*を分子に、基準財政需要額*を分母にして求める理論上の数値です。
財政力指数* (単年度) が1以上の場合は、普通交付税の算定上その自治体は豊かとされるため、普通交付税が交付されない不交付団体となります。
- 日野市はこの30年間では
 - ①交付 14年間 (H11～H15、H22～H30)
 - ②不交付 16年間 (H1～H10、H16～H21)
 となり、近年では平成22年度から9年間連続で交付団体となっています。

【グラフ】 財政力指数の推移



6 財政指標 (2) 経常収支比率

項目	H30 (決算年度)	H29 (1年前)	前年度比 (増減数)	前年度比 (増減率)	H20 (10年前)	H10 (20年前)	S63 (30年前)
経常収支比率*							
分母に臨時財政対策債等の借り入れを含む	97.7%	89.9%	+7.8ポイント	-	90.6%	95.1%	69.0%
分母に臨時財政対策債等の借り入れを含まない	100.0%	92.8%	+7.2ポイント	-	94.3%	98.8%	69.0%

(概況)

- 財政構造の弾力性を表す経常収支比率*は97.7%で、前年度と比べて7.8ポイント悪化しました。悪化の主な要因は、歳入では市税の増があったものの、地方消費税交付金をはじめとした各種交付金や地方交付税が減少し、歳出では扶助費や委託料などの物件費、介護保険など特別会計への繰出金が増加したためです。
- 現在の経常収支比率*の算定方法は、臨時財政対策債*という借金を借り入れると、借金で収入が増えることになるため数値が改善されます。この借金を含まないで計算した場合は100%となり、前年度と比べて7.2ポイントの悪化となっています。
- 新たな施策や建設事業などの臨時的な支出にまわせる税収等がなく、財政の硬直化が進んでいます。今後も、少子高齢化に伴う扶助費や繰出金の増加が継続し、法人市民税の税率引下げなどの制度改正も予定されています。既存事業の見直しや歳入確保の取組など財源を生み出す努力が必要です。

■ 経常収支比率とその内訳

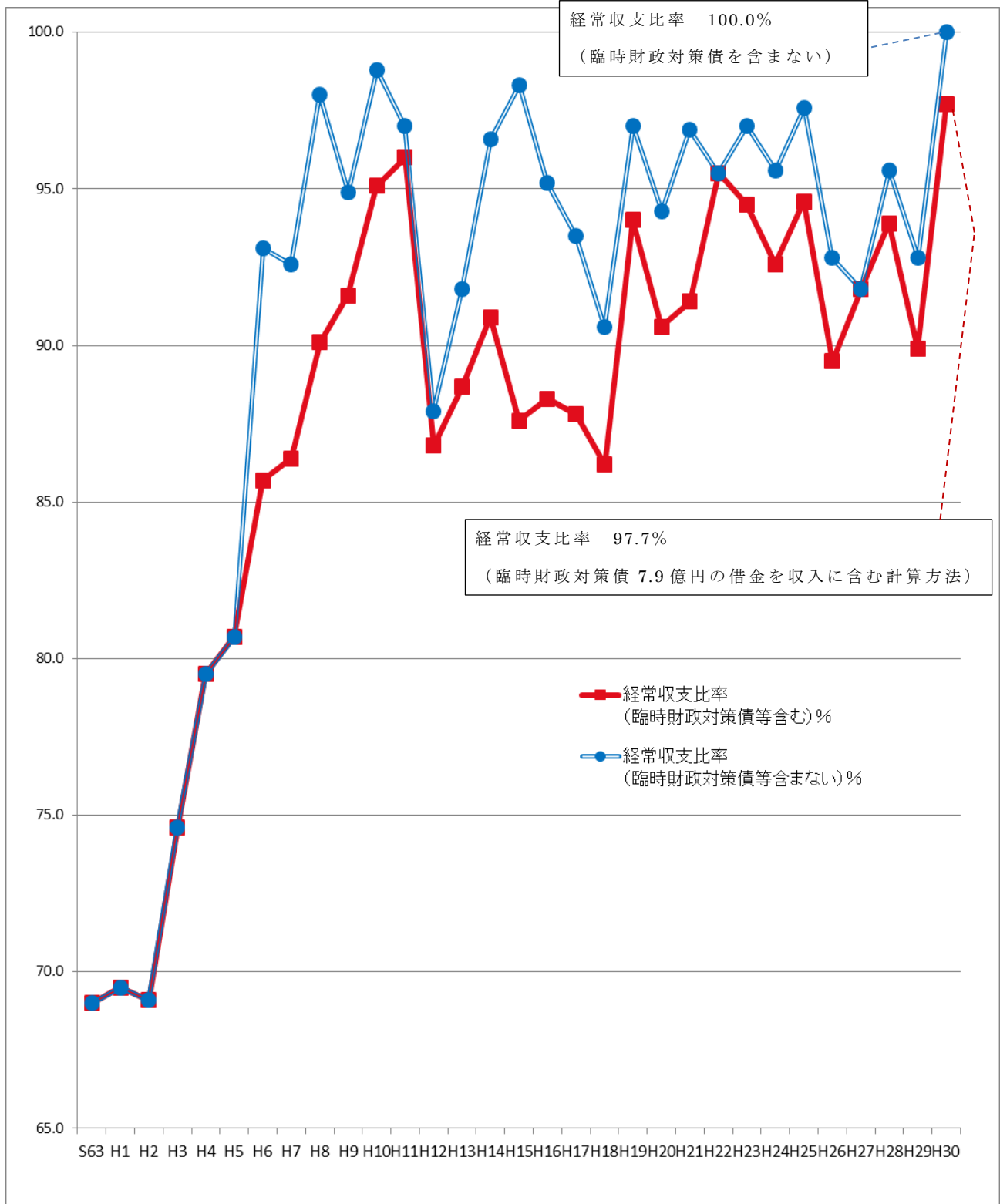
(単位：億円、%)

	H27	H28	H29	H30	増減
①市税などの経常的な収入	342.3	331.1	342.8	334.7	▲ 8.1
②うち経常的な経費に使われている額	314.1	316.3	318.1	334.8	+16.7
③=①-②新たな施策や建設事業などに使える額	28.2	14.8	24.7	▲ 0.1	▲ 24.8
②/① 経常収支比率*	91.8%	95.6%	92.8%	100.0%	+7.2%

※①には臨時財政対策債*を含んでいません。

- 経常収支比率*は①市税などの経常的な収入のうち、どのような経費にも充てることができる一般財源が、②どの程度経常的な経費に使われているかを表す指標です。数値が低いほど財政構造が柔軟で、③新たな施策や建設事業などの臨時的な支出に使える財源を多くもっていることとなります。
- 経常収支比率*100.0%の内訳は、税収等334.7億円(①)に対し、334.8億円(②)が経常的な経費に使われており、支出が収入を上回る赤字状態となっています。新たな施策や建設事業などの臨時的な支出にまわせる税収等がなく、貯金の取崩しや借金の借入れなどの臨時的な収入がなければ経常的なサービスの財源でさえもまかなえていないことを表しています。

【グラフ】 経常収支比率の推移



- この30年間では、平成4年度までは80%を下回る水準でしたが、景気の後退等による市税の変動や高齢化の進展等による社会保障関連経費の増加などから、平成19年度以降では概ね90%台が継続しており、財政構造の硬直化が進んでいます。

6 財政指標 (3) 公債費負担比率

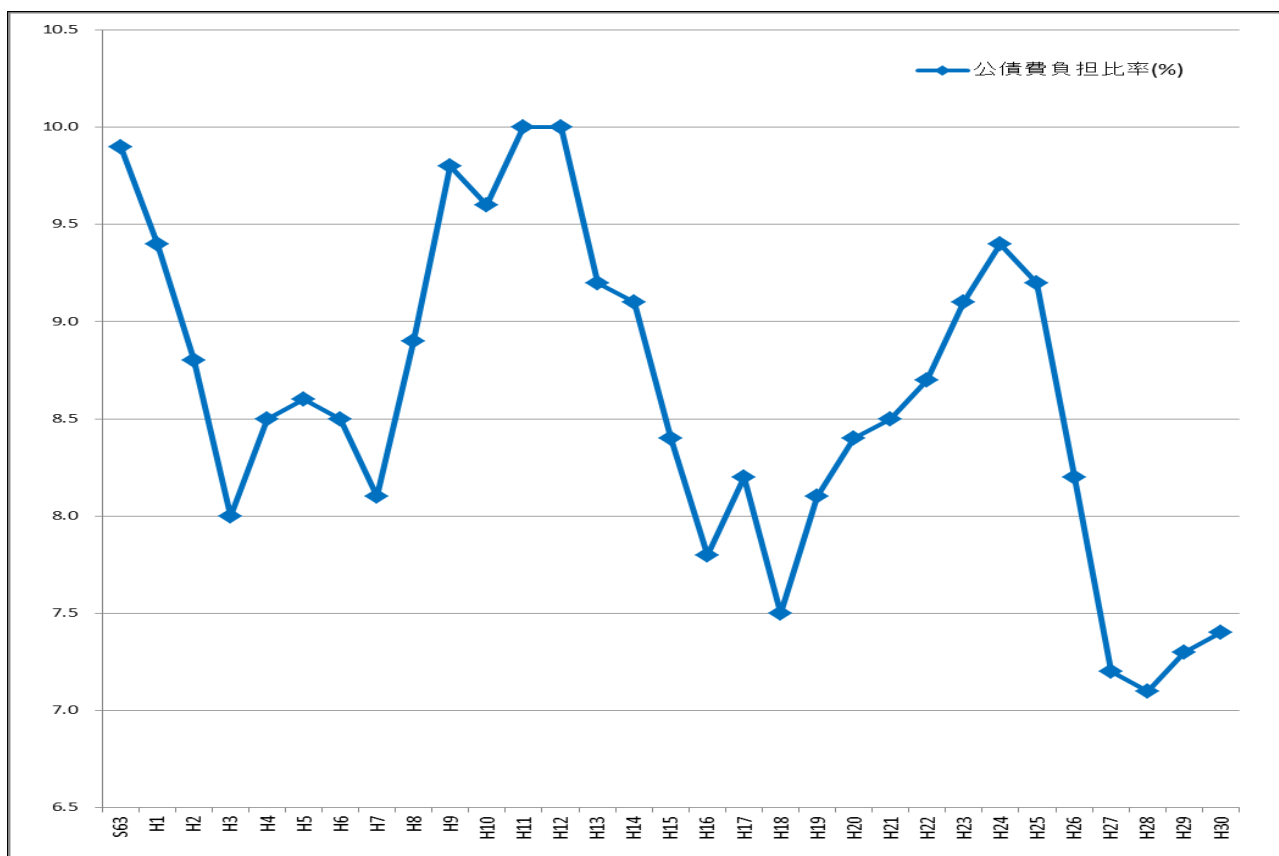
項目	H30 (決算年度)	H29 (1年前)	前年度比 (増減数)	前年度比 (増減率)	H20 (10年前)	H10 (20年前)	S63 (30年前)
公債費負担比率	7.4%	7.3%	+0.1ポイント	-	8.4%	9.6%	9.9%

(概況)

- 市債(市の借金)は将来の長期間にわたって返済が義務付けられる経費であり、将来の市の財政に大きく影響します。市債を借り入れる場合には、将来の負担を考えて無理なく返済ができるのか十分な見極めが必要です。
- 公債費負担比率は、経常収支比率*と同じように財政構造の弾力性を判断する指標の1つです。借金の返済(公債費)に対して、様々な経費に充てることができる市税等の一般財源がどの程度使われているかを示しています。
- 一般に15%を超えると黄色信号、20%を超えると赤信号と言われます。
- 平成30年度は、前年度と比べて0.1ポイント悪化して7.4%となりました。
- 指標の分母となる一般財源の総額は前年度に比べて約1.1億円(+0.3%)の増となりましたが、分子の公債費が平成26年度に借り入れた臨時財政対策債の元金償還が始まったことなどから増加し、分子に充てられた一般財源が前年度に比べて約0.5億円(+1.5%)の増となったためです。
- 30年間の推移でも、近年は概ね10%を下回る低い水準を維持しています。

【グラフ】公債費負担比率の推移

(%)



7 多摩地域26市との比較

【普通会計】

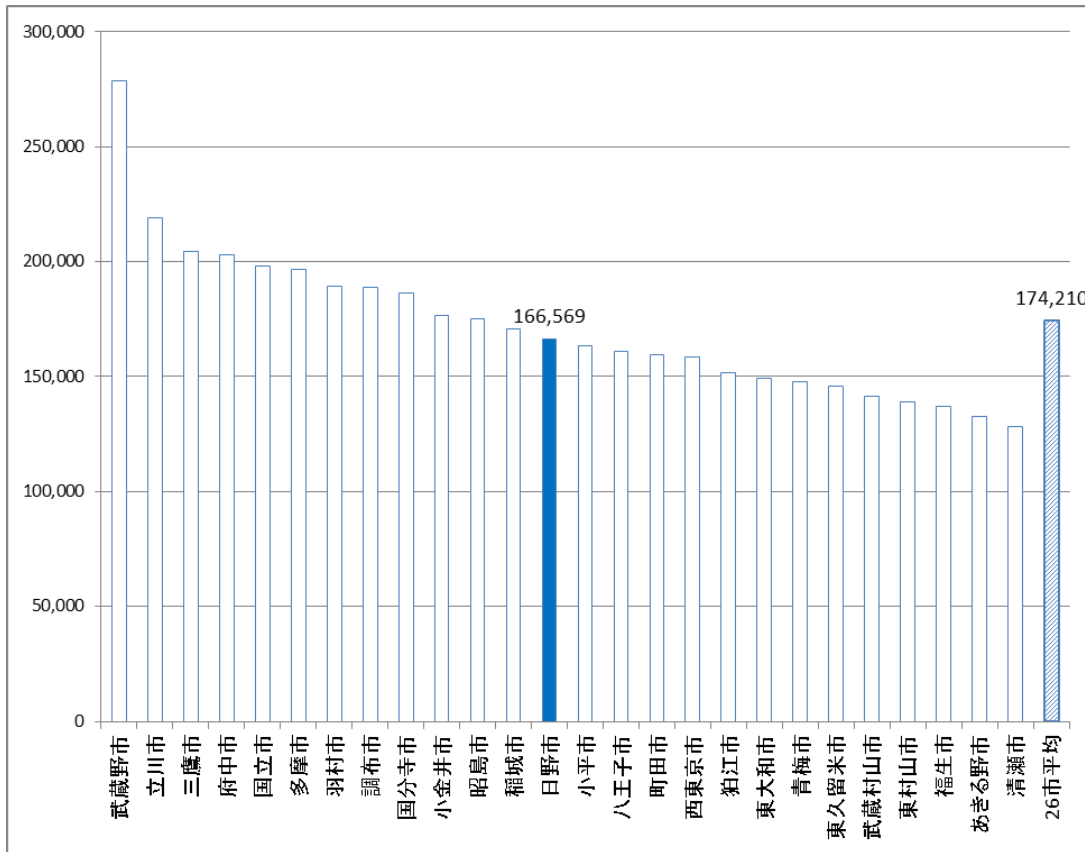
項目		順位	日野市	26市平均
人口（人）		8	185,393人	160,426人
標準財政規模*（千円）		10	34,388,561千円	31,873,862千円
市民一人当たり （円）	市税収入	13	166,569円	174,210円
	人件費	10	53,871円	51,425円
	扶助費	22	101,262円	114,260円
	公債費	19	17,155円	20,365円
	繰出金	10	41,671円	39,906円
	投資的経費	3	50,175円	36,099円
	積立金残高	10	76,999円	81,845円
	積立金のうち財政調整基金*残高	16	23,037円	26,087円
	地方債残高	14	185,805円	194,627円
実質収支比率*（%）		16	4.7%	5.5%
公債費負担比率（%）		18	7.4%	8.4%
財政力指数*〔3ヵ年平均〕		14	0.973	0.984
経常収支比率*〔臨財債含む〕（%）		4	97.7%	93.2%
経常収支比率*〔臨財債含まない〕（%）		9	100.0%	97.1%

※順位は、多摩地域26市中のもので、降順（数値の大きい方から1位）です。

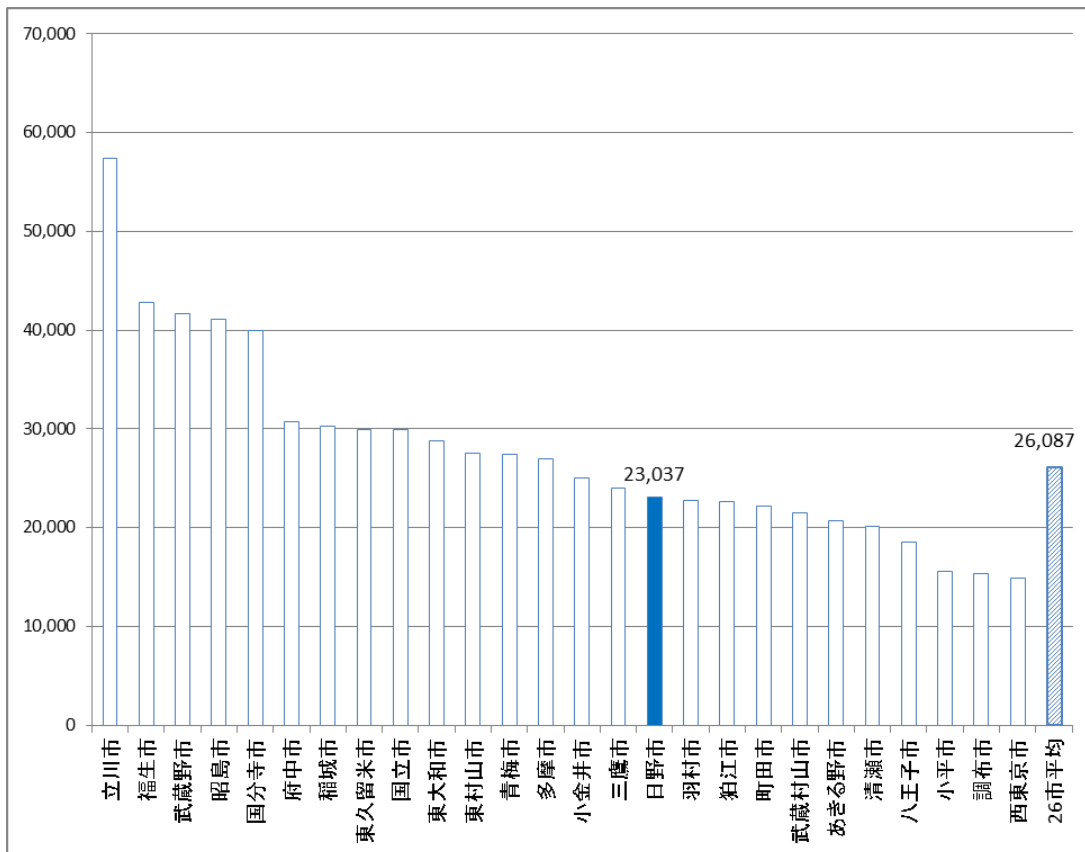
※市民一人当たりの26市平均は、26市の合計額／26市の合計人口で算出しています。

- 日野市の人口と標準財政規模*（税収等の一般財源の大きさ）は26市平均を上回り、人口は多い方から8番目になります。
- 市民一人当たりで見た場合、市税収入（市民一人当たりを使うことができる税収という意味）や支出、基金（貯金）や市債（借金）の残高は、概ね平均的な水準（中位）になっています。
- 財政指標（財政力指数*・経常収支比率*）は、経常収支比率がやや高いものの、概ね平均的な水準（中位）になっています。

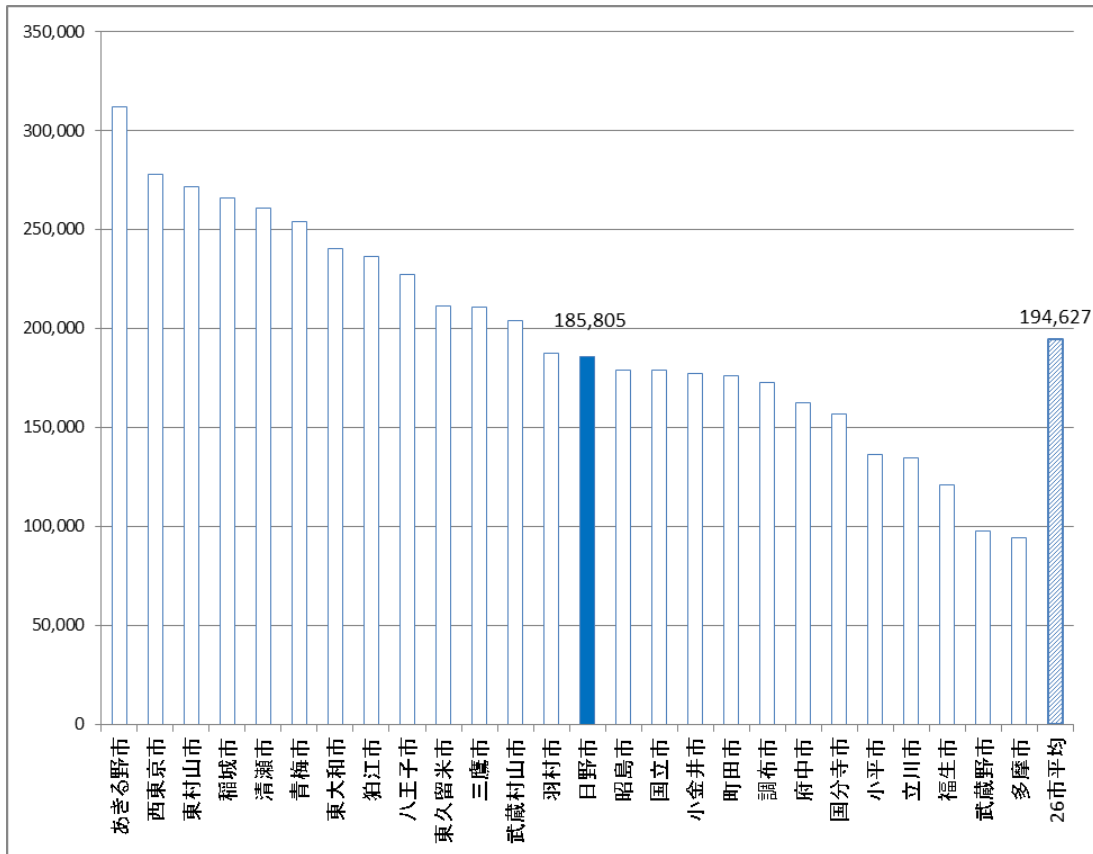
○市民一人当たり市税収入【平成30年度決算】 (単位：円)



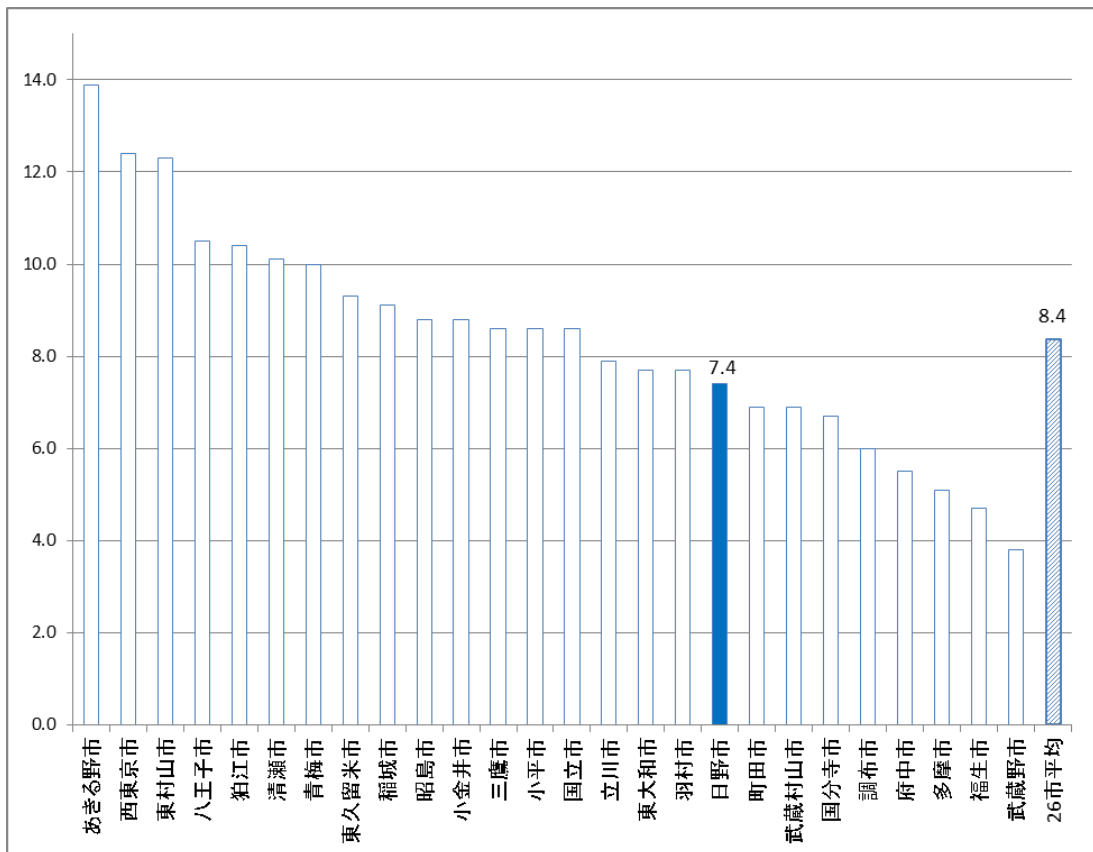
○市民一人当たり財政調整基金残高【平成30年度決算】 (単位：円)



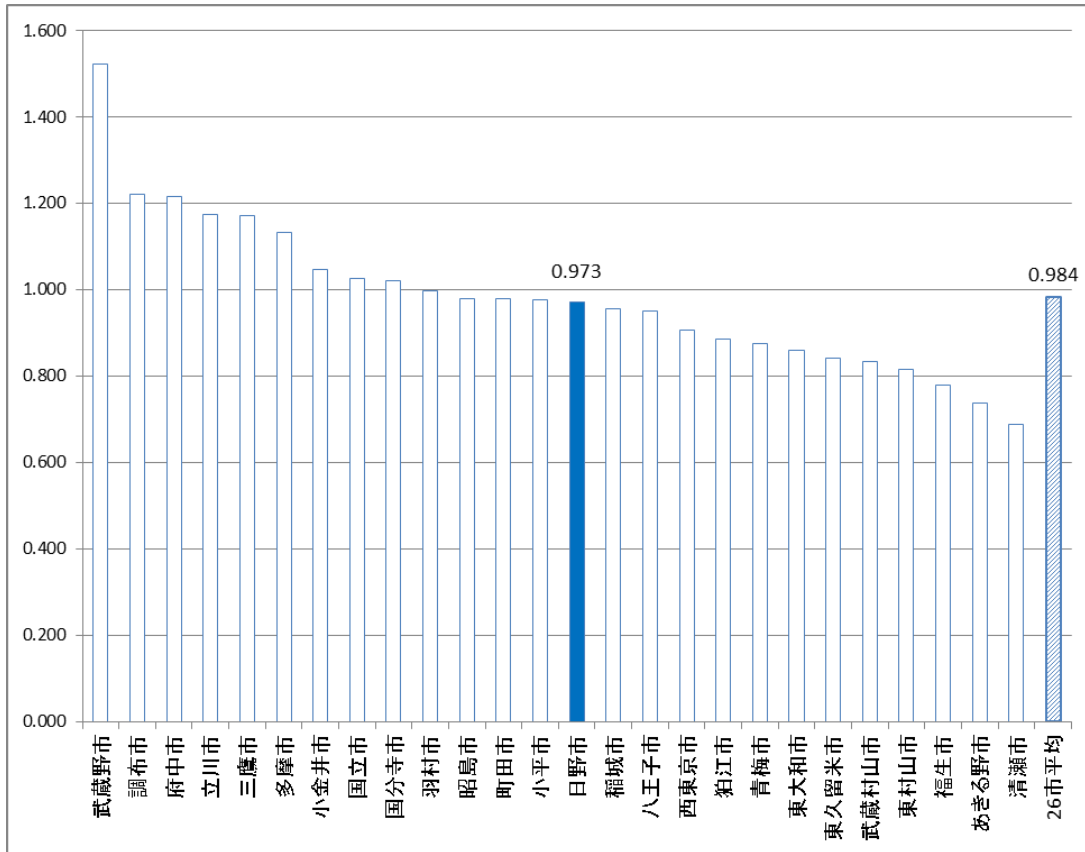
○市民一人当たり地方債残高【平成30年度決算】（単位：円）



○公債費負担比率【平成30年度決算】（単位：％）

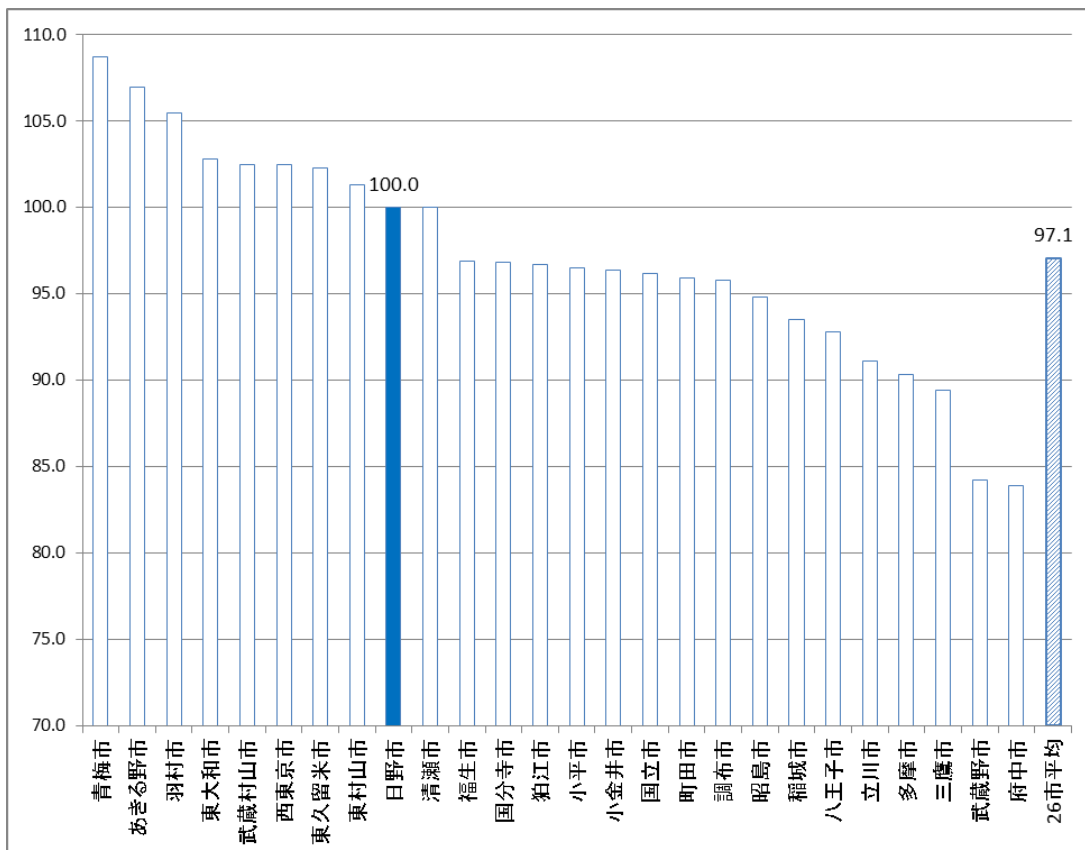


○財政力指数（3カ年平均）【平成30年度決算】



○経常収支比率（臨時財政対策債の借入れを含まない）

【平成30年度決算】（単位：％）



* (用語解説)

歳入歳出差引額 (形式収支)

＝歳入決算額－歳出決算額

決算年度に収入された現金と支出された現金の単純な差引額。(現金主義)

実質収支

＝形式収支－翌年度へ繰り越すべき財源

予算措置した年度に事業が完了できない場合に、翌年度へ繰り越して事業を行うことがある。形式収支から翌年度へ繰り越して行う事業の財源を引いたものが実質収支。(発生主義)

単年度収支

＝当該年度の実質収支－前年度の実質収支

形式収支と実質収支は前年度以前からの累積のため、当該年度1年間だけの収支。

実質単年度収支

＝単年度収支＋財政調整基金積立額－財政調整基金取崩額＋地方債繰上償還額

単年度収支には財政調整基金(市の貯金)への積立てや、この基金の取崩しなどの財政調整の結果が含まれるため、これを除いた実質的な当該年度1年間だけの収支。

実質収支比率

＝実質収支／標準財政規模

実質収支の黒字額がどの程度が適度であるかは、まちの財政規模やその年の経済状況等によって異なるため一概に言えないが、一般的に標準財政規模の3～5%程度と言われている。

標準財政規模

- 地方税、普通交付税、地方譲与税、都道府県税交付金などの一般財源ベースでの地方自治体の標準的な財政規模を示す指標。
- 実質収支比率、実質公債費比率、連結実質赤字比率、将来負担比率、経常収支比率などの基本的な財政指標や、財政健全化指標の基礎となる。
- 標準財政規模は、実際の市の歳入決算額等を積み上げて算出するものではなく、普通交付税の算定過程の計算がベースになっている。そのため、実際の歳入決算額等とは差異が生じる。
- 普通交付税算定の基準財政収入額をベースにしているが、基準財政収入額を算出する際には、地方譲与税等の一部の税目を除いて75/100を乗じて算定しているため、標準財政規模の算出では、すべての税目について100/100に直して算出している。

- 計算式は次のとおり

$$\begin{aligned} \text{標準財政規模} &= \\ & (\text{基準財政収入額} - \text{地方譲与税等※1}) \times 100 / 75 \\ & + \text{地方譲与税等(※1)} + \text{普通交付税} + \text{臨時財政対策債発行可能額} \end{aligned}$$

- ※1 基準財政収入額を算出する際に75/100に割り落とされない税目
具体的には、個人市民税所得割のうち税源移譲相当額、地方譲与税、
地方消費税交付金のうち税率引上げ分、交通安全対策特別交付金

財政力指数

- 地方自治体の財政力を判断する理論上の指標とされるもので、普通交付税の算定に用いられる基準財政収入額を基準財政需要額で除して求める。

$$\text{財政力指数} = \frac{\text{基準財政収入額}}{\text{基準財政需要額}}$$

- 財政力指数は数値が大きいほど財源に余裕があるとされるので、1を超える団体は普通交付税が交付されない不交付団体となる。

財政調整基金

- 市の貯金のひとつ。年度間の財源の変動や災害などに備えて決算剰余金などを積み立てて、財源が不足する年度に活用するための貯金。

臨時財政対策債

- 市の借金のひとつ。地方自治体の一般財源不足に対応するため、特例的に借り入れることができる借金。普通交付税算定の中で借入れ上限額が決定される。

基準財政収入額・基準財政需要額

- いずれも普通交付税の算定基礎になる数値であるが、各自治体の実際の歳入歳出予算決算額ではなく、モデル計算や推計計算が用いられる。
- 基準財政収入額は、市税（都市計画税などの目的税は除かれる）や都道府県税交付金、地方譲与税等の標準的な一般財源収入額になるが、地方譲与税等の一部を除き、75/100に割り落とす。また、前年度の収入実績を基に全国的な推計伸び率を乗じて当該年度を推計する方法がとられる税目もある。
- 基準財政需要額は、標準的な行政サービスを提供するための一般財源の額。実際に地方自治体が支出する額ではなく、仮想の自治体を想定した上で標準的な経費と考えられるものを積み上げるモデル計算になる。

経常収支比率

- 地方自治体の財政構造の弾力性を判断するための指標で、人件費・扶助費・公債費のように毎年度経常的に支出される経費（経常経費）に充当された一般財源の額が、地方税や都道府県税交付金などの毎年度経常的に収入される一般財源に占める割合をいう。

歳出の経常経費 － 特定財源（国都支出金や使用料・手数料など）

経常収支比率＝

地方税、都道府県税交付金等の一般財源、臨時財政対策債

※地方税からは都市計画税などの目的税は除く。

平成13年度以降分母に臨時財政対策債を加えることになった。

- 経常収支比率が低いほど、地方税などが新たな財政需要や建設事業などの臨時的な支出にまわせる財源があり、財政構造が柔軟であることを表している。
- 逆に指標が高くなると、財政構造が硬直化して新たな住民ニーズに対応できる余地が少なくなり、100%を超えるということは、経常的な収入である地方税などだけでは、固定的な経費がまかなえなくなっていることを意味している。

平成30年度 日野市の普通会計決算概要

編集 日野市企画部財政課

〒191-8686 日野市神明1丁目12番地の1

TEL 〔直通〕042-514-8076

〔代表〕042-585-1111 内線 4311～4313